
リベラリズムディア

狐白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リベラリズムディア

【Nコード】

N2654T

【作者名】

狐白

【あらすじ】

主人公である葉通 昼【ホミチ アキ】は幼馴染と一緒に学校の帰り途中に、あることがトリガーとなって異世界にトリップしてしまう。そこで主人公が最初に会ったのは漆黒の精霊だった。

精霊に助けてもらった主人公はそれからトリップしたときにはぐれてしまった幼馴染を探す為に世界を駆け巡る。

「・・・あれ？もしかして私の周りって人間がいない・・・？何で！？」

精霊、聖獣、吸血鬼、魔王、魔物etcetcと人外に好かれる主

人公の運命は・・・？

第0話 透明色のプロローグ（前書き）

二つ目の小説です。

至らぬ点も多々あると思いますがよろしく願いますm（――）

m

第0話 透明色のプロローグ

「^{カス}春ちゃん!!」

「^{アキ}昼ちゃん!もしかして此処でずっと待っていてくれたのかい?」

「うん!だって今日はうちで春ちゃんの誕生日パーティーやるって言ってたよね?」

「そっか。遅くなってごめんね。それと待っていてくれてありがとう。」

「

ニツコリと優しい笑みを浮かべて頭を撫でてくれる春ちゃん。

春ちゃんの本名は水上 春太【ムナガイ カズタ】。たしか今日、6月20日で19歳になるはず。春ちゃんと私の付き合いは10年以上の所謂幼馴染。

一体何のシャンプーを使ったらそうなるんだ、というほどサラサラの薄茶色の髪に、優しい垂れ目は温かいかんじのする焦げ茶色。背は多分私と20cmくらい差があるんじゃないかな・・・目測量だけ。

小さい頃から兄弟がいない私にとってはお兄さんの存在で、とても私に優しくしてくれる。勿論私はそんな春ちゃんが大好き。

で、私が葉通 昼【ホミチ アキ】。今年家の近くにある高校を受験し、なんとか受かった私は自転車で約20分の高校に通学している、そこら辺にいる女子の1人。

髪は日本人には珍しくもない黒髪を後ろでひとくくり、所謂ポニーテールにしている。といっても私の髪はこの間、邪魔になつてきたので肩につくくらいの長さに切ってしまったからなんちゃってポニーテールだ。長かった髪を切ってしまった次の日の朝、春ちゃんに「何で切っちゃったの?かわいかったのに・・・」と残念が

られたのは記憶に新しい。

「あれ？何だ水上。お前彼女いたんだ？」

春ちゃんと話していると、春ちゃんの背後から誰かがひょいっと顔を出してくる。いかにも運動神経あります、というかんじの背が高い男子だった。といっても春ちゃんよりは低い。

「かつ／＼／＼彼女じゃないですッ！」

その人がぼそつと何気なく言った言葉は私には刺激が強すぎた。動揺した私は力いっぱい否定してしまう。自分でも顔が真っ赤になっているのがわかった。

「ははっ、かつわいーなーその反応。彼女じゃないんなら俺がこの子もらっちゃおうかな」

「ええッ！？／＼／＼」

気がつけばその人は私の隣に来ていて、首に腕を回してきたのに驚き思わず大きな声を上げてしまった。私は此处が廊下だと気がついて急いで両手で口を押さえる。といっても押さえたのは大声を出した後だったのだが。

「あはははは。昼ちゃん。悪いんだけど先に校門まで行ってもらってもいい？オレちょっと用事が出来ちゃったからさ。」

すると春ちゃんはまるでその人が今此处に居ないかのように言うって、私の首に回されたその人の腕を無理やり退ける。その時に春ちゃんに掴まれたその人の腕から、ミシッという危ない音が聞こえてきたのは気のせいだと思いたい。

何故か春ちゃんから妙なオーラを感じ取り、私は何も聞かず即座に首を縦に振った。

「ありがとう昼ちゃん。」

私は首を傾げながら階段にさしかかる。

今、3階から2階への階段を下りているところだ。私と春ちゃんが居た場所は生徒会室の前。春ちゃんは実は生徒会書記という役職についているのだ。思えば昔から春ちゃんは文武両道成績優秀眉目秀丽で完璧だった。つい最近まで私は彼は実は人造人間なんじゃないかと疑うくらいに。

私がひーひー言いながらやつの思いで受かった春ちゃんと同じ高校も実は偏差値軽く60超え。そこを春ちゃんは涼しい顔して当たり前のように受かってしまったのだからすごい。この高校に合格出来たのも、春ちゃんが忙しいときも合間を縫って一生懸命勉強を教えてくれたからだ。本当に彼には感謝しても足りない。

（・・・そういえばさっきの人。何処かで見たことあるなあって思ったら、生徒会長さんだ。たしか名前は・・・

「トゥミ任海 ハジム」

「なんだよ？」

昼が階段越しに見えなくなった途端、先ほどまで浮かべていた笑みは嘘のように消えてなくなり、冷え切った瞳は目の前でヘラヘラし

ている生徒会長に向いていた。もし今までのことを第三者が見ていたら「誰？この人」ってかんに霧囲気がガラッと変わっているのだ。

春太はあからさまに不機嫌な様子を隠そうともしないで、地を這うような声音で言い放つ。

「気安く昼に触れるな。昼が穢れる。」

しかし春太の雰囲気が一変しても一は驚く気配は皆無で、これが普段通りとでもいう様に苦笑いをしながら言い返す。

「穢れるって・・・水上、お前いつもあんな風に笑ってた方が女子にもてるんじゃない」

「バキッ・・・パラパラ・・・」

「あつはつはつはすみませんごめんなさいも二度とあの子には手を出しませんッ！！」

物凄い音が廊下に響いたと思えば、春太の右手は壁（注 コンクリ）にめり込んでいた。春太は無表情で一を睨む。その眼力は凄まじく、多分紙を置いたら虫眼鏡で紙が燃えるように穴が開くことだろう。それを見た一は命の危機を感じ、顔を真っ青にして素早く頭を下げる。それから泣き叫ぶ寸前の如き怒涛の早口で謝った。

「・・・・・・・・」

それを冷めた目で見てから突然興味をなくしたかのように視線を外し、何事もなかったかのように階段を下りていく。

実は水上　春太の普段こそ今のようなのだ。この学校の中で彼を知っているクラスメイトだったらきつと皆こう言う。「超クールで人をあまり寄せ付けない雰囲気を持っている近づきにくい奴」だ。誰に対しても興味を持つことはなく、常に冷めた瞳で物事を観察しているのだ。親に対してもあまり喋る方ではない。唯一、彼が笑みを見せるのは“葉通　昼”のみ。生徒会長でクラスメイトである一も春太があんな笑顔を浮かべて楽しそうに話しているのを見たのは初めてだったのだ。

何故昼にだけは笑顔を見せるのか。

彼の中で、昼は大切な存在なのだろう、と一は思っている。ただそれが恋愛感情から来ているのかどうかはわからないが。一が分かることはただ1つ。春太が昼という存在をこの上なく大切にしている、ということ。

「・・・あいつも、笑えるんだな」

一はほっとしたように軽く笑いながら生徒会室に戻っていった。

―それが今生の別れになることは知らずに。

「ごめんね、昼ちゃん。」

「あつ、春ちゃん！ううん、全然大丈夫だよ。早く帰ろう。」
「そうだね。」

校門のところで待っていること約5分。昇降口で彼が靴を履いて急いで走ってくるのが見えた。それから駐輪場まで歩いていき自転車を取りに行く。

因みに普段は一緒に帰っていない。私は帰宅部なので、生徒会をやっている春ちゃんとはどうしても時間が合わないのだ。しかし今日は春ちゃんに無理言って生徒会の活動を早めに切り上げてもらったため、こうして一緒に帰ることが出来ているのだ。

私と春ちゃんは自転車には乗っていない。自転車に乗ってしまうとどうしても口数がお互いに少なくなってしまうって沢山お話できない

から。春ちゃんは何も聞かずに私に合わせて自転車を押しながら歩いている。こういうさりげない優しさをくれると私はつい嬉しくなってしまう。

「そういえばさつき生徒会室から顔出てきた人って生徒会長さんだよな?」

「あー・・・うんそうだよ。生徒会長の任海一。あれがどうかした?」

心なしに春ちゃんの頬が引き攣ったような気がしたが、私の気のせいだっただのかもしれない。もう一度彼の表情に視線を這わせると、いつも通りの優しい笑みが広がっていたのだから。

「ううん。ただ気になったから。あ、春ちゃん。」

「ん?」

私は自転車の籠の中に入っている鞆の中から、手のひらにぎりぎり収まるくらいの箱を取り出す。それを後ろに隠して彼の視線を惹きつけてから、はいつと彼に差し出した。

箱にラッピングで巻いて結んである薄黄色のリボンが風に靡く。

「お誕生日、おめでとう!!」

「え?これ、オレにくれるの?」

驚きを隠せないように目を見開いて、彼は私の手の平にある箱をそっと片手で包むように取る。

「早く開けてみて?」

「うん。」

彼が包みを開くと、そこにあつたのは衝撃吸収のために白い布に包まれた銀色の腕時計だった。モチーフは“海”で、時計盤の上には銀色の魚が吸数匹気持ち良さそうに泳いでいる。どうみてもそこら辺の雑貨屋で売っている安物には見えない。

「これ、高かったでしょ？」

「うーん、正直に言うところとだけ。だけど、私、春ちゃんには本当に感謝してるんだよ。今の高校に合格出来たのも、忙しい時間削って私に勉強教えてくれた春ちゃんのおかげなんだよ。だからそれはそのお礼も込めて。」

私は笑顔を浮かべて彼を見つめる。

春ちゃんは一瞬本当に驚いた顔をして、それからにはかむように照れ笑いをした。それに対して私も悪戯な笑みを浮かべる。

「それに最近、以前使ってた腕時計が壊れたって不便そうにしてたよね？」

「ははは、昼ちゃんは……。本当にありがとう。すっごい嬉しいよ！」

春ちゃんはそう言うのと早速腕時計を左手首に力チャツとつけてくれる。私はそれが嬉しくて、零れ出る笑みを抑えることが出来なかった。

—ポチャンツ

この音が聞こえてくるまでは。

「……あれ？春ちゃん、なんか水の音が聞こえてこなかった？」

「え？別に何も聞こえてこなかったけど……。雨でも降ってきたの

かな？」

二人して空を仰ぐ。自然と足が止まる。
空は薄暗く曇ってはいるものの雨特有のじめじめした感じはせず、
今から雨が降ってくるとは到底思えない。

（・・・さっきたしかに水が落ちるような音が聞こえてきたんだけどなあ・・・。気のせいだったのかな）

ーポチャンツ

そう思つて首を傾げているとまた同じ音が聞こえてきた。

「あつ！ほら今聞こえた！春ちゃんは？」

「うゝん・・・聞こえてこなかったなあ。取りあえず雨が降られても困るから急いで帰ろうか。」

「うん、そうだね。私今傘持つてないし・・・。」

傘は学校に傘置き場に置いてきてしまった。雨のにおいがしないからいいか、と思つて置いてきてしまったのを今更後悔しても遅い。
私は春ちゃんの言葉に頷いて、一歩踏み出したときだった。

ーバシャンツ

「え！？」

何故か足を踏み出した場所には直径1mくらいの水溜りがあったのだ。つい最近まで梅雨の季節だったので水溜りがあること事態はおかしいわけではない。
しかしだ。

水溜りに底がないのは納得できない。

私の片足はズブズブと底なし沼に嵌ったときのように沈んでいるのだ。私はあり得ない物を見たときのように、春ちゃんの眼前で年頃の女子にあるまじき行為（口を半開きにして呆然とする）をしていた。

「え！え？ちよっ・・・春ちゃん！」

「昼ちゃん！！手に掴まって！！」

春ちゃんは自転車を放り出して水溜りで足が濡れるのにも係わらず、私に駆け寄ってきて右手で私の左手首を掴む。私も必死で右手で春ちゃんの左手首を掴んだ。

「何、これ・・・！？何で水溜りに沈んでるの！？ど、どうしよう春ちゃん！」

「ってなんかオレまで沈み始めた！？」

気がつけば春ちゃんの両足も水溜り・・・訂正底なし沼に沈み始めていた。

私はもう既に腰の辺りまで水位が来ている。私は混乱して、何故か頭の中では走馬灯が流れだしていた。

「昼ちゃん！目が据わってるっ！しっかりして昼ちゃん！」

「・・・春ちゃん・・・今までありがとう。私、春ちゃんに会えて本当に良かったよ・・・。あ、お父さんとお母さんにお別れの挨拶してないや・・・」
「昼ちゃん！！かむばーっくっ！！」

とどうこうしているうちに私はもう首しか上に出ていない状態だった。これを第三者が見たら生首と間違えて叫びながら逃げていくことだろう。かなりシニールな光景だ。

「春ちゃん。もう、手、放していいよ。私もう沈んじやいそうだし・
・」

「何言つてんの!?!?・・・ほら、昼ちゃん。お兄さんがずっと掴んであげるから。ね?そんなこと言わないでよ?」

春ちゃんが悲しそうな表情で私を見つめてくる。それを見ていたら
なんだか私まで泣きたくなくなってきてしまった。

もしかしたら私、溺れて死ぬのかもしれない。

こんな底なし沼の中でえら呼吸じゃない私が生きていけるはずがない。自慢じゃないが、肺活量は人より少ない。頑張つて水に長く潜つていられて15秒だ。

(・・・ああ、私、せっかく高校に合格して春ちゃんと同じ学校に通うことが出来て、すごく嬉しかったのに・・・。友達も沢山とはいえないけど結構仲良くなった人とかもいるのに・・・)

「昼ちゃんツ!!!」

—ゴポツ

(もう口も沈んじやつて話すこともできない。・・・しかもなんか意識が朦朧としてきた・・・)

「——!!——ツ!!——」

(・・・春ちゃん・・・。)

目がゆっくり閉じられる。

もう春ちゃんの声は届かなくなり、私が聞こえているのは水の音だけ。

(・・・そうだね。だって私・・・水の中に沈んだから・・・

意識が遠のいていく。

春ちゃんだけは助かるといいなあ、と思いながら目の前が真っ黒に染まっていくのを感じた。

第0話

終わり

第1話 二つ輝く銀色の月

S i d e ? ? ?

もうそろそろ日が暮れる。

太陽は森の向こう側に沈んでいき、もう空には2つの月が浮かんでいた。今日は満月らしい。2つの月が一斉に満月になったのは何年ぶりだろうか。

夜風は冷たく、さあっと美しい漆黒の髪を揺らしていく。

2つの月が満月の所為か、何故か今日はとても気分が晴れていた。そして何気なく眼下にある大きな川を見下ろす。

「・・・?」

その川に何か異様なものがゆらゆらと流されていた。

銀色の月のような瞳を側めてそこに流れているものを見つめる。そして目を見開く。

その川で流されているのは1人の人間だった。

うつ伏せでゆらあつと浮いているのを見るに、その人間に意識があるようには思えない。一体何処から流されてきたのだろうか。此処は人間が易々と入って来れる場所でもない。魔物がいないからといって1人で入ってくるものは自殺志願者か、ただの気違いくらいのものだ。

この川は海にまで繋がっているとはいえ、そこから流れてきたという可能性も少ない。海や川には魔物が多く生息しているため、此処

まで五体満足で流れてくる人間はまず無いに等しいのだ。推測ではないが、恐らくこの人間はこの森の中で迷って川に落ちたのだろう。

このとき、自分はとても気分が晴れていた。

だから、普段の自分ならそのまま気にも留めずに見過ごしてしまったのだろう、川に流されている人間を助けてしまっていた。

―ザパアアツ

漆黒の闇が自分のまるで手足のように蠢き、ここから約1km離れている川にまでもものすごい速さで物理法則を無視して伸びていくと、川に流されている人間を持ち上げる。そしてそつと草むらに置いた。人間は自分たち精霊と違って壊れやすい。この闇で人間を掴み少しでも力を入れてしまったら、まるで豆腐のように潰れてしまうことだろう。

そしてその人間が寝かされている草むらに影を通して一瞬で移動する。それからその人間の容姿を観察していると、1番最初に目に付いたのがその艶やかな髪だった。自分でも目が驚きに見開かれているのが分かる。

仰向けに寝かせた人間の髪は、美しい漆黒だったのだ。顔立ちは中性的で最初は少年かと見間違えたが、胸の微かな膨らみを見て少女だと再認識した。服は今までの長年見たことのない斬新なデザインで、水を含んだ為にひどく重くなっていた。流されている間になくなってしまったのか、靴は片方しかない。

「・・・・・・・・」

普段ならば、このまま放っておいたはず。

しかし意思と反して体は勝手に動く。ずぶ濡れの彼女を自ら抱き上げると、腰まである漆黒の髪を翻して森の中へ入っていった。

S i d e O u t

♪

体を何か温かいもので覆われたような感じがした。

「…………ッ!!」

勢いよく上半身を起こして、重い目蓋をゆっくり開く。

「……森……?」

自然と首が傾げられる。

何故森なのだろうか。私の目の前に映るのは青々とした木のみ。周りは少し薄暗く、真上は木々に覆われていて朝なのか夜なのか全く判断が出来ない。

(……私はたしか……水の中に沈んで死んだ、はずじゃ……?)

水溜り……訂正底なし沼に落ちた。

たしかに自分は沈んで、息が苦しくなつて、目の前が真っ暗になつて、もう駄目だとあのときたしかに思った。死んだと、思った。はず……なのに何故自分は森の中に居るのだろうか。全く何もかも全然分からない。

ふと視線を自分の体に向ける。先ほど目が覚めたときから何気なく触っていたのだが、私の体に黒い布が巻きつけられていた。その布は不思議な肌触りだけとても温かくて、何処か優しいぬくもりを感じる。そう、ぬくもりを直に感じるのだ。

(……なんで私は真っ裸でこの布に包まれているんだろう……。なんだか謎過ぎて考える気力も失せるよ……。それから私の制服何処いった!?)

水に沈んだときはたしかに制服を身につけていたはずなのに。
学校から帰ってくる途中だったのだから制服を着ているのが当たり前だ。

（・・・沈んだとき、私は一人で帰宅していたわけじゃない・・・。
―ッ―！）

「^{カス}春ちゃん!?」

そう。あのとき、春ちゃんも隣に居た。

もしかしたら春ちゃんが私を助けてくれたのかもしれない。

（もしそうだったら春ちゃんにお礼言わないと・・・）

此処から見渡す限り、春ちゃんの姿は何処にも見当たらない。

私は立ち上がって春ちゃんを探しに行くことにした。裸足の所為か、立ち上がって地に足をつけると、ひんやりとした感触が足の裏の皮膚を伝って体中を包み込んだ。思わず驚いて声を出してしまいそうになったものの、なんとか抑えることが出来た。なんかこの行為にデジャヴを感じるのは気の所為なのだろうか。

もし彼が私を助けてくれたのだとしたら、この近くに居るはず。

なるべく土の上は歩かずに、苔や太い木の根っこの上を歩くようにしている。そのほうが何故か精神的に落ち着く感じがしたから。そんな根拠の無いことでも、今はひとつひとつが全て大事なことのようないきがしてきたのだ。

意外にも素足で苔や根っこの上を歩くのは気持ち良かった。時々木の根のごつい部分に当たってしまったりするものの、それも自然の中を歩いているんだなあって気がして、なんだか気分がとても良くなってくる。マイナスイオンが此処には沢山充滿しているのだろ

う、多分。

知らず知らずのうちに歩くペースが速くなり、ぴょん、ぴょんと木の根から木の根へと飛び移る・・・なんてことをしていたら見事木の根に躓いて、意思とは無関係に体が前に傾いた。

「!」

恐らく顔面に来るだろう痛みを堪える為に目を強く瞑る。

しかし衝撃がやってくることはなかった。転んだはずなのに何故なのだろう、と私は不思議に思っただけで恐る恐る目を開いた。

「!」

衝撃は来ない。その代わりにやってきたのは目前で銀色に輝く2つの月だった。いや、正確に言えば月ではない。月を思わせるような切れ長の双眸が、本当に目の前にあったのだ。闇夜のようにしなやかな美しい黒髪は腰まであり、この世のものとは思えないほど整った顔が私の鼻先にくっついてしまっているのではないかというほどの至近距離に存在していた。そして今私がどういう状況かというと、その人にお姫様抱っこされているのだ。

一瞬その人の綺麗な顔が春ちゃんとだぶったような気がした。でも春ちゃんではない。

（・・・誰だろう？それにしてもすごく綺麗な人。）

思わず見惚れてしまった。

顔はとても綺麗で女の人かと一瞬間違いそうになるが、体つきからしてこの人は多分男の人。こんな綺麗な男の人は春ちゃん以外では今まで見たことがなかった。

しばらくの間、お互いにぼけーっと見つめあい、もとい観察し合っているところの人はそつと地面に降ろしてくれる。

「あ、助けてくれてありがとう。あの、これくらいの背の男の人、見ませんでしたか？」

春ちゃんの背を、右腕を頭上に伸ばして大体の高さを示しながら聞いてみる。しかしこの人は首を横に振った。どうやら見ていないようだ。

一体彼は何処にいるのだろうか。早く会って無事を確かめたいのに……。

「あの、ありがとうございました。では……」

早く会いたい。無事を確かめたい。そればかりが心の中で膨らんで、私は自分自身の体の状態を把握していなかった。

その男の人に頭を下げて、先に行こうと足を一歩踏み出したときだった。ふいに目眩が襲ってきてふらつと体が後ろに倒れる。しかしまたもや男の人に助けられたようで、この人の腕の中にすっぽりと収まっていたのだ。一度ならず二度までも……と私は恥ずかしさがこみ上げてきて、頬がかあつと熱くなる。

「あの、すみません……。」

俯いて呟くように謝る。すると間いれず耳に聞き心地のいい声音が響いてきた。言わずもがな、勿論この男の人の声だ。

「……お前の体は長い間川に流されていてかなり衰弱している。・

「・・・まだ動かないほうがいい。」

ぶっきらぼうな言い方だが、この人が私のことを心配してくれているのがよく伝わってきた。それに何故だか、この人の腕の中に居ると落ち着く。それはこの人が悪い人ではないからじゃないかと私は思う。

「・・・ありがとう。貴方はとても優しい人なんだね。」

そう言っただけ私は、ほっこりと浮かんできた笑みを彼に向けた。すると彼は何に驚いたのか一瞬目を見開いて無表情を崩す。それはすぐ元の無表情に戻ってしまったが、先ほどより少しだけ表情が柔らかくなったような気がした。

「な、んか・・・眠い・・・」

すると今までの疲れが一気に押し寄せてきたような強い眠気を感じる。

私は頭を優しく撫でてくれている大きい手の感触を感じながら、再び眠りに落ちた。

終わり

第1話

第2話 その微笑みは黒銀色（前書き）

早速お気に入り登録して下さった方々、ありがとうございますっ m

—— m

第2話更新です！

第2話 その微笑みは黒銀色

「……ん……」

「……気がついたか？」

ぼやける視界の中で銀色の光が見えた。優しく大地を照らす、満月のような瞳。

体をゆっくり起こして声の主である彼に目を向ける。頭の上にあるぬくもりの正体は、どうやら彼が私の頭を撫でていてくれたようだ。そのぬくもりが心地よくてつい目を細めてしまう。

私が起きたことにより自然と彼の手は頭の上からなくなり、少し寂しさを覚えた。

「……えっと、何度もありがとう。そういえばこの布って貴方がくれたの？」

「ああ。」

「ありがとう。あ、そういえば私の着ていた服を知らない？」

この布をくれたのが彼だったなら必然的に服を脱がせたのも彼、ということになる。

（……って私この人に裸見られたッ！？／／／／）

カアツと顔が熱くなる。

この人は一体どう思っているのだろうか？

（私の、は、裸を見たことを……。）

しかしこの人は無表情で、何を考えているのか読み取することは出来ない。

「・・・どうしたんだ？熱でもあるのか？」

「あつ、な、なんでもないですッ！！で、私の服は？」

上ずった声を上げてしまった私は決して悪くは無い。だって彼が急に顔を近づけてきてピタッとつけてきたのだから。それを反射的に少し頭を引いて避けると、話を元に戻すことで気持ちを落ち着かせることにした。

「・・・？あの服なら“此处”にある。でもまだ濡れてるからまだ着ないほうが良い。」

「此处？」

彼は下を向いて自分の影をトントンと片手で叩く。しかしそこには何もなく、私は訳が分からずに首を傾げた。

「“此处”にしまつてある。・・・要らないのなら消すが？」

相変わらず彼が叩く場所は苔が生えた地面でしかない。埋めたとも言つのだろうか。もし埋めたのだとしても、埋める理由が見つからない。

よく分からないが、彼の真面目な表情を見て嘘をついている訳ではないんだなあ、と思つて首を横に振つた。

「うつん。消さないでもらえる？私の唯一の服がなくなっちゃうし、このままじゃ何処にもいけないから。」

「・・・そうか。」

彼の声が静かな森にすうつと溶け込むように響いた。とても心地よい声音だ。

（・・・それにしてもどうしよう。春ちゃん、一体何処に居るんだろう・・・）。取りあえずこの布をどうにかして服らしくすれば大丈夫かな？・・・早く探さないと・・・）

もしかしたらこの近くに春ちゃんはいないのかもしれない。でも私は何故か、探しにいかなくてはいけないような気がする。私は逸る心を抑えられずに立ち上がる。どうやら眠っていたおかげか、普通に歩けるくらいにまでは回復したようだ。

私の背をはるかに超している（多分2mくらいある）彼を見上げる。

「えっと、貴方の名前は？」

何故か私がこう聞いた瞬間、彼は少し躊躇うように間を置いた。それから重く口を開く。

「俺は・・・闇の精霊と呼ばれている。」

ぽかん。

私はつい呆気にとられて、彼の瞳を見つめてしまふ。

「・・・えっと・・・私の聞き間違いじゃなければ今、闇の精霊、って・・・？」

目を見開いて見つめる私の何が面白いのか、彼は一瞬無表情を崩して高圧的な笑みを浮かべた。私にはその笑みを、彼が無理やり浮かべているように思える。悲しいかんじのする笑みだった。

「・・・俺が怖いのか？」

私は首を横に振る。

全然怖いなんて思わない。この人は私を助けてくれたし、害を加えてきたわけでもないのだから。何故怖いなんて思えるのだろうか？

「怖くないよ。さっきも言ったかもしれないけど、貴方は優しいから。」

彼が息を呑む音が聞こえた。

何をそんなに驚いているのだろうか。私は不思議に思って首を傾げる。

無表情だったのが崩れて、驚いた表情を露にしていた。それから彼はバツと明後日の方向に向いて、真っ赤になった顔を私から隠すように背ける。そのとき、彼の耳元についている三日月形のシルバーピアスが涼しげな音を立てていたのが聞こえた。

「・・・で、あの・・・闇の精霊って・・・一体何なの？」

「・・・。」

一瞬時が止まった。

主に彼の方の時間だが。

ついさっきまで赤かったはずの顔は啞然としてこちらを見つめ・・・いや凝視していた。何か信じられないものでも見たかのように。

「・・・何か私、変なこと言った・・・かな？」

全く身に覚えが無い。何故彼が固まってしまったのか。

「・・・お前、俺のこと、知らないのか？」

「？うん。だって、貴方と私、初対面だよな？」

「いや、そういう知ってるじゃなくてだな・・・。」

「ん？」

私は彼が何を言いたいのか分からず聞き返したのだが、彼ははあ、とため息をついてから何かを諦めたような顔で「何でもない。」と呟くのが辛うじて聞こえた。

「で、話を戻すけど、貴方の名前は？まさか闇の精霊って名前じゃないよね？」

そんな名前があったらすごい。

「・・・俺に名前はない。」

「え？」

名前がない？それは何を意味しているのだろうか。

私は彼の言葉が予想外だったのに驚いてつい聞き返してしまう。

「名前が、ない？何で？」

名前が無ければ不便なことが沢山あるはずなのに。

私が聞き返すと彼は「必要が無い」と答えた。

「貴方と呼ぶときはどうやって呼ばれていたの？」

「俺を呼ぶものは居ない。」

「名乗るときは？」

「名乗る相手がいない。」

「名前がなければ困るかもしれないよ？」

「困ったことは無いな。」

淡々と返してくる。その表情は“無”。“無”のはずなのに、何故こんなに悲しそうに見えるのだろうか。
私はそんな彼の瞳を見つめた。

「なら、私が貴方を呼ぶよ?」

「・・・?」

「私が名乗る相手になる。」

「・・・。」

「私は貴方の名前はないと、困るよ?」

双方黙ってお互いを見つめあった。

「お願い。貴方の名前を教えてください?」

名前がないなんておかしいと思う。名前は自分の存在を確かなものにしてくれる大事なもの。それがこの人に欠けているのなら、その欠けた部分は埋めるべき。

沈黙を先に破ったのは意外にも彼のほうからだった。

「・・・はあ・・・。お前は、なんて言うか・・・。」

呆れた、という風のため息をつかれてしまった。

このとき私は以前読んだ本に“相手の名前を聞く前に先ず自分から名乗らないと失礼だ”と書いてあったのを思い出していた。だから彼は呆れてしまったのだろう。

「あつ、私自身がまだ名乗ってなかった!先ずは自分から名乗らな

いと失礼だよね・・・ごめんなさい。私は葉通^{ホミチ} 昼^{アキ}。で、貴方は？」

私は慌てて名乗る。それから期待して彼のほうを見つめるが、なかなか名前を覚えてくれない。

「・・・もしかして・・・迷惑、だった？」

不安が頭を過ぎる。

しかしその不安は杞憂に終わった。

「いや、違うんだ・・・迷惑、じゃない。寧ろ・・・」

「？」

彼が何かを呟いたようだが、小さすぎて聞き取ることが出来なかった。

「先ほども言ったが、俺には名前が元々ないんだ。・・・だから名乗れといわれても名乗れん。」

「あ。」

私は大馬鹿だった。

ついさつき彼は言っていたじゃないか。「名はない。」と。それなのに名乗れ、なんて言われても名乗れるはずがない。唯この人が困る原因を作っただけではないか。

恥ずかしさとあまりの自分の馬鹿さ加減に呆れて、知らず知らずのうちにじわりと目じりが熱くなっていた。

「お、おい！？・・・なんで泣いてるんだ！？俺が悪いのか？おい、泣くな！」

彼は慌ててしゃがみこみ私の目線に合わせると、その大きな手のひらを私の頭に置いて宥めるようにぐりぐりと撫で回す。少し強引な感じもしたが、それを上回って心地いいかんじがした。でもこのままでは鳥の巣になってしまうことだろう。

私は彼の言葉を否定するように首を横に振る。
彼が悪いわけではないのだから。

「・・・貴方が悪いんじゃない、よ？私が悪い、の。ひつく・・・ごめ、んなさい・・・。名前が無いのに、ひつく、名乗れるはずがない、よね・・・」

「・・・アキは悪くない。だから、泣かないでくれ・・・。」

首を縦に振る。嗚咽が混じってしまつて上手く話せないのだ。それに泣き止め、と言われてピタツと泣き止めるほど私は器用ではない。彼を困らせてしまうと分かっていても、一度緩んでしまった涙腺を閉じるのは至難の業だ。

「・・・なら、アキが俺の名をつけてくれればいい。」
「え？」

突然言われた言葉に驚いてつい素っ頓狂な声を上げてしまった。あまりに唐突過ぎて出掛かっていた涙も奥に引つ込む。俯かせていた顔を上げると、初めて会ったときのように彼の顔が極至近距離にあった。

「アキが俺の名を呼んでくれればいい。」

「・・・私が？いいの・・・？」

「ああ。・・・アキに、呼んで欲しいんだ。」

微笑した彼はとても神秘的で、男の人にこう言っているのか分からないけど、とても綺麗だった。
自然と首が縦に動く。

「・・・うん。じゃあ・・・リユノワール、はどうか？リユ又は月、ノワールは黒って意味なんだけどね。貴方の瞳はお月様みたいだし、髪は闇夜のように真っ黒だから、リユノワール。」

銀色の瞳と漆黒の瞳が重なる。

その途端、私は体中に何か温かいものを感じた。その温かいものが何かは分からないけど、これを感じていると安心できる。

数秒間お互いに見詰め合っていると、彼はふわっと今までにない笑みを浮かべた。

「・・・なんだ、アキ？」

名を呼んだら応えてくれた。

それだけでも私はすごく嬉しくて、「なんでもないよ？唯呼んだだけ。」と緩みまくった頬で返事をした。

「・・・そうか。名前というものは案外良いものだな・・・。」

「そうだよ？名前があるとなんか良いよね。でもリユノワールってちよつと呼ぶのには長いかなあ・・・。略してリユノって呼んだほうがいいかな？」

長いから略すということもあるが、私的には略して呼ぶと相手に親近感が沸くのだ。なんかそれだけの動作でその相手と仲が良いんだってかんじがして、私はあだ名が好きだ。

「・・・好きにするといい。唯他人の前ではそのほうが良い。真名

はアキだけが呼んでくれればいい。」

「分かったよ。じゃあ二人だけのときにリュノワールって呼ぶね。でも、もう呼べるのはこれで最後、かな……。」

こうしていると忘れてしまいそうになるが、早く春ちゃんを探しにいく、という使命が私にはあるのだ。ずっと此処に居るわけにはいかない。お父さんやお母さんも帰りが遅いと心配しているに違いないのだから。

私が眉を寄せながらそう言うと、リュノワールは疑問を浮かべて見つめてくる。

「私、ある人を探しにいけないから。リュノワールとは此処でお別れだよ。あ、でも最後に出ればこの森から抜ける道を教えてくれる?」

「……お前は何を言っているんだ?」

「……え? うわっ! ねえ、ちよつとノノノノ」

急に視界がぶれたかと思うと、いつの間にか私は彼の腕の中に居た。数秒経って自分が抱っこされていることに気がつく。

何をするの? と疑問を浮かべて彼の目を見ると、その瞳には少なからず怒っているという雰囲気漂っている。私は訳が分からず首を傾げるしかなかった。

「俺もお前と一緒に行く。……というかずっと一緒だ。」

「え? ええ! ? ど、どういうこと……?」

彼の言っている意味がよく分からない。言葉は理解できるけど、何故彼がそんなことを言うのかさっぱりだ。

「精霊の名をつけたアキは俺と“契約”したんだ。普通契約したものと共にあるのが精霊だ。その証拠にお前の首筋に闇の契約印がついているだろう？」

「・・・へ？」

何それ聞いてない。

「・・・お前、常識だぞこれくらい。五歳のガキでも知っていることだ。」

「心を読まれた！？」

「契約したものの同士心が通じ合うのも当たり前だ。・・・アキ、お前は本当に何も知らないのか？」

地味に心を読まれるのはショックだった。

心が読まれる〓考えていること全てお見通しされる。プライバシーなんてくそくらえ。隠す？何それ、おいしいの？状態だ。

「落ち着け。必要以上に読まないから安心しろ。」

「・・・本当・・・？」

「ああ。」

少しだけほっと安心することが出来た。それと同時に今までの常識に辻褄が合わないことに気がつき、ふとそれを口に出してしまう。

「・・・ん？精霊、なんて地球に存在してたかな・・・？」

「・・・チキュウ？なんだそれは・・・？」

一瞬非常に嫌な予感が背中を過ぎった。

これ以上聞いちゃいけないーぜねえちゃん。と第六感がそう言っている。でも私の口は止まらなかった。

「この世界の名前だけど？」

「・・・？この世界はチキユウ、なんて名前じゃない。」

（・・・ん？今何て言った？）

これ以上聞くな聞いたらいけない聞いたらあかん！！

「ヴェルトシリア。この世界の名前はヴェルトシリア、だろう？・・・おい？どうしたんだ？アキ・・・？」

茫然自失になる、とはこういうことなんだ、と私は身をもってこのとき知ったのだ。

おとーさん、おかーさん。

私はしばらく帰れなそうです。夕ご飯は残しておいてくれると嬉しいです。

どうか・・・春ちゃん、無事でいて・・・。

第3話 水色勇者は今何処（いずこ）？

Side カスタ
春太

アキ
昼と繋がれていた手が離れた。

きちんと掴んでいたはずなのに彼女が水の中に沈んでしまった途端、彼女の手はまるで第三者にその手を無理やり解かれたかのようにスルツと呆気なく離れてしまった。

（昼・・・ッ！！）

ーゴポゴポツ

そして俺自身も昼と同じように水に沈み込み、意識を失った。

（ーッ・・・。）

意識を失ってからどれくらい経ったのか分からない。

ふと目を開けると俺はまだ水中に居た。水の中に居るというのに通常通り呼吸が出来ているのに驚いていると、急に体が水面へと引き寄せられる感覚が体中を覆った。

ーザパツ

水面下から顔が出た瞬間、眩しい光が目に入り思わず側める。俺は

そのぼやける視界の中でひとときわ輝く人影を見た。

(・・・昼?)

「ようこそ勇者様！ヴェルトシリアへ。私たちは貴方が来るのを心待ちにしていました!!」

「・・・・・・・・。」

その人影は昼ではなく、昼より少し背が高い、13、14歳くらいの少女が白い清楚なかんじのするワンピースを着て、満面の笑みを浮かべてこちらに手を差し伸べていた。

その少女の双眸は現実ではありえない桃色で、その丸い目をきらきらと輝かせて自分を見ている。肩につくかつかないかの長さの髪は砂色で内側にくるんとカールしていて、とても優しい雰囲気醸し出している。そして目に付いたのはやたらいろんなところに結んである薄桃色のリボンだった。

「・・・・・・・・?ようこそ勇者様！ヴェルトシリアへ。私たちは貴方が来るのを心待ちにしていました!!」

「・・・・・・・・。」

――しーん・・・

「・・・・・・・・えっと、ようこそ勇者様！ヴェルトシリアへ。私たちは貴方が来るのを心待ちにしていました!!」

「・・・・・・・・。」

――バシヤッ

このまま水に体を浸したままだと風邪をひくかもしれないので、地

面に両手をつけて一気に陸に上がった。制服が水を吸収してしまつたために、いつもより体が重く感じる。

取りあえず此処が海じゃなくて良かった、とほつと息をつく。海だったら海水で体中べとべとと気持ち悪い思いをしなくてはいけないなつていただろう。

久しぶりに地に足をつけたような変な感覚を感じながら、此処が何処か把握する為に周りを見回す。簡単に言えば、花が咲いている木々に覆われた森、というところだろうか。足元にも小さな花が沢山咲いている、所謂花畑があつた。そして背後には直径5mくらいの池。いくら観察してもどう見方を変えても下校途中の見慣れた道には見えなかつた。

(・・・仮にあの時水溜りでなくマンホールに落ちたと考えれば・・・いや、どう考えてもあれば水溜りだ。下手に考えると逆に頭が混乱するから止めるとして、携帯は・・・水に濡れて壊れてるから連絡のしようがない、と。・・・とにかく今は昼を探すのが先決か・・・)

携帯を防水にしなかつたのが今になって悔やまれる。といつても相手、つまり昼の携帯も防水じゃないのでどっちにしろ連絡は取れない。

今はこの場所が日本の何処に位置するのか。それと公衆電話を探しながら歩いていくしかない。そう思って俺は歩き出した。

連絡する手段さえあれば誰かしらに電話出来るので事情を話して車を寄越してもらえばいい。親にあまり迷惑をかけたくないが、今はそんなことを言っている場合ではない。

「あ、あの！！勇者様？」

（・・・RPGのやりすぎか、オタクか電波か。まあどれにしても俺には関係ないが。）

「無視しないで下さい！勇者様！！」

（途中まで昼と手を繋いでいた。絶対放さないように握ってたのに何かに邪魔されたかのようにほんの一瞬で繋がりが断ち切られた。・
・あれはただの偶然、なのか？）

「聞いてますか！？・・・はっ・・・もしかして私の言葉が通じていないんじゃない？・・・翻訳魔術失敗！？そんなっ・・・でもあの時ちゃんとかけたはずなのに・・・。」

（携帯が二機とも壊れてなかったら連絡が取れてお互いの状況把握が出来た。・・・ないもののことを考えていても仕方が無い。ひたすら探すしか、ないか。頼むから、無事で居てくれ・・・）

「・・・いや、でも私がこうして話しかけているってことぐらいは分かるはずじゃ・・・？あの！聞こえてますか！？・・・っていない！！？あっ、待って下さい！！」

ぱたぱたとこちらに駆けてくる足音が聞こえてくる。どうやら先ほどまでそこでぶつぶつ独り言を呟いていた電波オタク少女がつかきたらしい。そして少女は俺の隣を歩き始めた。
何故そこまでして俺に付きまとうのか。正直鬱陶しい。

「あの！わたし、ミリーナ・ディ・ランドリーラと申します。勇者様のお名前は？」

（そういえば水に沈んでから今までどれくらい経ったんだ？）

昼にもらった腕時計に目を向ける。防水仕様なのか壊れている様子はない。内心ほっとしつつ時計盤に目を這わせた。

（・・・12時36分？どういうことだ？）

やはり壊れてしまっていたのだろうか。もしこの時計が壊れていなかったらあれから8時間以上経っているということになる。状況把握が難しい。

「・・・あ、えっと、勇者様は勇者様ですよね！・・・あつ、そこらは危険です！！魔物がうろつろしているのですここからはわたしが転移魔術で一氣に城まで飛びます。・・・ってお待ち下さい！！本当に危険なんです！！」

待つてくださいいやなんやら騒いでいる少女を無視して先に進む。あんなのを相手にしていたら日が暮れるどころか軽く一日経過しそうだ。こんなところで時間を潰すほど暇ではない。

ところが俺の目の前に何か大きな獣が出てきて、俺が向かおうとした道に居て進めそうになかった。

―ガルルルルルッ

「ああ！！早くこちらにお戻り下さい勇者様！こちらは結界があるので襲われることはありません！早くこちらへ！！」

「なんだ犬か。」

「犬ではありません！！魔物です！早くお下がり下さい！！」

今にも泣きそうな叫び声とともに、低い唸り声を上げながら“犬”

はこちらに襲い掛かってきた。野生化しているのか妙に爪や牙がでかく感じる。

「勇者様!!?」

―ガシッ

「・・・ふう。」

“犬”にアイアンクローをしたのは初めてだった。ミシッという音がしたが、死んでいるわけではないだろう。

(まあ、白目むいて泡吹いているが・・・)

少女は何故が大きく目を見開いて、ありえないものでも見たように驚愕していた。あれ、そのうち顎はずれるんじゃないか？

取りあえずいつまでも掴んでいるのも疲れるので気絶した(?) “犬”をドサツと地面に落とした。目の前に障害物がなくなったのでまた歩き出した。

「あ・・・す、すごいです!流石勇者様です!素手で魔物を倒してしまっなんて・・・。」

すると今度は目をきらきらと輝かせてなにやら感心しているようだった。それからこちらに小走りで来て隣に立つと、その少女は何を思ったのか急に俺の手を掴む。

「貴方が勇者様で間違いないです!では城まで飛びます!」
「離れる近づくな・・・っておいッ!？」

―ぐにやり

なんとも言い知れない浮遊感を感じ、目を開けたそこは先ほどまでいた森ではなかった。

「はいっ、お城に着きました。お父様！この方が勇者様です！」
「おお、そなたが光の勇者か。ミリーナ、ご苦労だったな。」

王座に座っている威厳を放つ男。高い天井、シャンデリア、赤い絨毯。

まるでおとぎ話に出てくる城のようだ。もし此処が本当に城だとしたら、王座に座っている男は必然的に王、ということになるのだろうか。

「勇者よ。召喚に応えてくれて感謝している。」
「……………」

返事をしない俺に不満を感じているのか、王の両脇に数人いる近衛兵だと思われる男性達がギロツと睨んできた。俺はそれをそよ吹く風のように受け流す。

「ここに勇者を召喚したのは他でもない。魔王を倒して欲しいのだ。頼まれてくれるな？勇者よ」

（……はあ。ここには電波とオタクしか生息していないのか？まあ？何だそのメルヘン溢れる言葉は！？……こいつ、正気で言っているのか？）

この男の言う戯言に呆れて俺は声を出す気にもなれない。付き合っ
てられるか。

「勿論魔王を倒した暁には娘の、ミリーナの婿として迎える準備もできておる。武器や防具、資金なども全て揃っておる。」

（ここからどうやって脱出するかが問題だな。今は大人しくしているのが得策か……。あの背後に控えている兵たちに1人で太刀打ちできるとは到底思えないしな。）

「明日には早速旅に出てもらおうと思うのだが構わぬか？」

「・・・分かりました。」

「受け入れてくれるのか！勇者よ！ではミリーナ。勇者を客室に案内してやれ。」

「はいお父様。」

こちらがアクションを起こさなくても此処から出してくれるらしい。非常にありがたいことだ。逃亡する手間隙が省けるのは嬉しい。本当はこうしている間にも昼を探しに行きたいが、此処から何処に向かっていけば良いか分からない。体調は常に整えておいたほうが良いだろう。

「では勇者様。お体が冷えているかと思しますので、先ずはお風呂にご案内いたしますね。」

風呂は何処の豪邸の風呂だと叫びたくなるほどでかった。取りあえず体を洗い温めることが出来たのでよしとする。制服はこの短時間で乾くはずがないので、少女が何処からか持ってきた服を不本意ながら着ることにした。全体的に白で統一されていて所々に金の装飾がついている。肌触りもなかなか良くて、着心地は悪くない。

それから少女に「お夕飯のときに呼びに来るのでそれまで休んでいてください」と客室に案内され、一人きりになったのでようやくひと段落つけるとベットに腰を下ろした。また客室もこれでもかというほど豪華で、今俺が座っている天蓋付きのキングサイズのベットが1番目に付く。

（・・・意味が分からない。なんなんだ・・・勇者、魔王、て。それに今のご時勢に王？日本は王政じゃない。一体此処は何処なんだ・

・・・？)

まさに“異世界”という言葉がぴったりと当てはまるのではないか？

まさか、と首を横に振って一蹴しながらも、頭の中ではそれが正解なのではないか？ともう一人の自分が言っているような気がしてなんともいえない感覚が体中を駆け巡る。

そしてふとあの少女の、何回も繰り返されて嫌でも頭に残ってしまった台詞が思い浮かんだ。

『ようこそ勇者様！ヴェルトシリアへ。私たちは貴方が来るのを心待ちにしていました！！』

(・・・ヴェルト、シリア・・・？そんな国、外国にあつたか？)

ない。そんな国は存在していない。

ーボフツ

片手で頭を押さえながらベットに盛大に寝転がる。思っていたより感触は硬い。

(・・・一体何が原因でこんなことに・・・)

頭が痛い。

出た結論を否定したくてもそれをこの状況が許さない。

『此処は“異世界”だ。』

たったそれだけじゃないか。導き出された結論は唯ひとつ。
目を閉じる。

「・・・ふざけるな・・・。昼を、返せ」

ぽつりと呟いた言葉は空を彷徨い、何処にも行けずそのまま溶け込むように消えてなくなった。

S i d e O u t

第3話

終わり

第4話 紫色の狼来襲

あれから、取りあえずこの森に他の人間の気配はない、とリユノワールが断言した為、私は春ちゃんを探す為に近くの町に向かうことにした。人が沢山往来しているところに行けば自然に情報が集まるのではないかと思ったからだ。

「あのさ、リユノワール・・・？」

「・・・なんだ？」

「重いと思うから下ろしてくれて大丈夫だよ？大変でしょ？抱っこしたまま走るのは・・・」

森の中を移動し始めて約二時間。

未だ一筋の光も差し込んでこないし、周りの景色も一向に変わることはない。本当にこの方向で合っているのかとそろそろ不安になってきたところだ。

といっても地理を全く知らない私がどうこう言えるわけもなく二時間ずっと同じ光景を見続けていたわけなのだが・・・流石に二時間ぶっ続けで抱っこされていると申し訳なく感じる。一見無表情で本当に疲れているのかは怪しいが、普通に考えて二時間一人の人間を抱っこしっぱなし＆走りっぱなしは流石に精霊である彼もきついのではないかと私は思い切って声をかけてみた。

「ふっ、平気だ。全く疲れていない。・・・それに方向はこっちで合っているから安心しろ。」

本音駄々漏れでした。

すっかり忘れていたが彼は私の心を読めるのだ。そこで私はふと思

いついたことがあった。それなら私も彼の心を読むことが出来るんじゃないのかな？」と。

そう思った時期もありました。

この二時間何度も彼の心を読んでみようとしたが、彼の心は黒い霧がかかったような感じで読むことは出来なかったのだ。何故なのか彼に聞いてみたところ彼曰く、「慣れればお前も出来るようになる」とのこと。体よく話を逸らされてしまったような気がするものの、あまりこれ以上深く聞かないほうが良いような気がしてそれ以上何も聞かなかった。

「・・・それにアキの走る速度だと多分、此処から出るのに一ヶ月かかる。」

「うん・・・だね。私もそう思う。」

約二時間、彼はそら恐ろしいスピードで森を駆け抜けているのだ。道路で走る鉄の塊もびつくりするくらい速い。おかげで私が見ている景色と言うのは、ぶれて原型がなんだか分からなくなった森にあるものが染め上げる前面緑の世界。

こんな速度で走っていたら風圧がすごいんじゃないか、と思っただけだが不思議なことに全く空気抵抗を感じない。恐らくリノワールが何かしてくれているのだとは思っただけがよく分からない。

そういえば私の体に巻きつけてあった布はリノワールが闇を物質化？して作ってくれたものらしい。闇って物質化するの？という素朴な疑問を彼にぶつけてみれば、不思議そうな表情で「これが普通だろう？何を言っているんだ？」とぼつさり切り捨てられた。私はこの時、此処では今までの常識が全く通じないから下手なことは言うまい、と心の中でそつと誓ったのだった。

「あ、光だ・・・！」

さらにあれから＋四時間の計六時間。

真上から暖かな光が差し込んできた。やっと森を抜けたようだ。

森の外には広大な草原があつて、吹き抜ける風を感じると共にこの

♪

草原が果てしなく広がっているような気さえする。久々に光を見た所為か、ものすごく眩しくて一瞬目を側めてしまったものの、目蓋を通り越して目に映る砂色の光は暖かくてつい笑みを零してしまう。だんだん減速していき立ち止まったリノワールは、そっと草原の上を下ろしてくれた。

「・・・光が、好き・・・なのか？」

彼はぼそつとそう呟く。その言葉が私に向けられているのを感じ取って、私は草原に視点を合わせたまま首を縦に振った。

「好きだよ。」

「・・・そうか。」

少し間があいて返事が返ってくる。心なしか彼の声音からは寂しいかんじがした。

「でも暗い所も好きだよ。」

振り返って彼を見上げる。逆光で彼が今どんな表情をしているのか分からない。でも彼がいつも微笑むときに感じる優しい雰囲気があった。

「・・・そうか。」

「ここからは一緒に歩こう?」

「ああ。」

歩きたびにふわりと当たる草が少々くすぐったく感じる。でもそれがとても新鮮で気持ちいい。

靴が片方川に流されてしまったらしく、私は今現在素足だ。流されなかったもう片方の靴はというと、私の制服と一緒に仕舞ってあるらしい。で、その仕舞ってある場所なのだが、これも彼に六時間運ばれている間に確認しておいた。

リユノワールは闇を司る精霊で、基本的に闇に関係するものは自由自在に操ることが出来るらしい。そして闇に関係する影も彼にとつては手足みたいなものらしく、自分の影に物を仕舞える収納スペースがあり、私の制服と靴はそこにあるらしい。

(・・・ふあんたじーだ・・・)

「?」

「あつ、なんでもないよ！ただの独り言だから」

心の声が駄々漏れなのもなかなか慣れない。ついこうして呟いてしまつと、それが彼にそのまま聞こえてしまつたのだから。それでも彼なりに考えてくれているのか、こうして私が一人で考え事しているとそつとおいてくれる。彼なりの気遣いなのだろう。こういうさり気ない気遣いをしてくれる彼はやっぱり優しいんだなあ、と再認識したりする。

「ん、空気がおいしい。」

流石異世界と言うべきか、日本と違って空気がすごく軽く感じられる。こう、クリアなかんじというか・・・。

リユノワールは私の言葉に首を傾げる。

「・・・空気がおいしい？なんだそれは？」

「うん、あのね、私の住んでいた場所は、人や物が溢れかえっていて空気が汚れてるんだよ。だから都会に行くと息苦しく感じたりす

ることも多々あったんだ。だけど此処の空気はすごく綺麗だから。」

「そうなのか？」

「うん。」

私が住んでいたのはどちらかといえば田舎のほうで、そんなに息苦しさを感じることは無かったかもしれないけど、此処の空気は格別重さを感じない。気分だけなら空を飛んでいるような、私の少ない語彙じゃ上手く説明することが出来ないけど、取りあえずそんなかんじ。

リユノワールはよく分からないとでもいう風に首を傾げていた。

「そつえばアキ。お前の住んでいた世界はどういうところなんだ？」

「えつとね・・・簡単に言えば魔法とかの代わりに化学が発展した世界、かな？つまるところ、魔法は私の世界に存在してなかったんだ。」

「魔法が、ない？」

信じられないと大きく目を見開く彼。

私としては今自分がこうして立っている世界が存在していることのほうが信じられない。まるで童話や小説の話の中にいる夢を見ているような、そんな曖昧さを感じるのだ。

「うんそう。魔法とか精霊とかはおとぎ話の中でしか存在しえないファンタジー・・・空想上の物なんだよ？」

空想上のものであって、決して現実には存在していない。

私は朝の某ニュースでやっている占いを信じるほうだが、現実にないものはない、ときちんと割り切っている。小さい頃でこそ姫だ魔法だドラゴンだとおとぎ話を信じていたときもなかったとはいえない

いが、年齢が上がるにつれて自然とそういうことも考えなくなつた。それなのに今自分がいる世界はそのおとぎ話のような世界だという。一体何の因果でこんなことになってしまったのか私には分からない。

「で、その分化学っていう人間の知能で作り上げられた“モノ”が沢山存在しているんだよ。私は私の世界も好きだけど、もしこの世界みたいに魔法が存在していたら、今のようになんか汚れたりしなかったのかなあ・・・？」

「・・・・・・・・」

――ぽふっ

何故か急に頭を撫でられた。

訳が分からず首を傾げて目を向けると、彼は優しい笑みを浮かべていた。私はその笑みを視界に捉えた途端、つい嬉しくなつて頬が緩んだ。

そんな時だった。

目の前に大きな犬・・・いや狼が現れたのは。

気がつくともリノワールは元の無表情に戻っていて、目の前に居る狼に銀色に怪しく光る瞳を向けていた。気の所為か、彼の影がうずうぞと動いているような・・・まるで自我を持っているように見える。

守るように私の前に一歩出たリノワールの服をつい手で掴んでしまっていたことに気がつかなかった。

「あの狼は・・・？」

「あれは狼ではない。・・・魔物だ。アキの世界の狼はあんな毒々しい紫色をしているのか・・・？」

興味深そうに聞いてくるが、残念ながら狼はそんな色していません。狼は何処からやってきたのかほとんど数が増えていき、数えてみたら8匹もいた。最初の狼が仲間を呼び寄せたのだろうか？

「・・・それにしても雑魚がうじゃうじゃと・・・人間の匂いに釣られて出てきたのか・・・？」

人間・・・？つまり私の匂いを嗅ぎ付けてこの狼たちはこんなに集まってきた？ということだろうか？いや、狼じゃない。たしか“まもの”、とリュノワールは言っていた。やっぱり“まもの”っていうとよくRPGに出てくる魔物のことなのだろう。なんか外見がそれっぽく思えるくらい毒々しい色をしているし。

その狼の形をした魔物の体中を覆っている剛毛は目に優しくない毒々しい紫色で、口からは鋭い牙と余程飢えているのか涎が絶えず垂れている。体長は2、3m前後。動物好きの私から見てもはつきり言っただけはグロイ。あの白が劣化して黄色くなった爪で引き裂かれたらひとたまりもない。即あの世へのご案内で天使たちが迎えに来てくれる。きっと。

（・・・なんか頭が混乱してきたよ・・・一体どうすればいいの？）

「リュノワール・・・」

服を掴んでいる手の力が強まる。

それに気がついたのか彼は無表情を崩し、微笑しながら大丈夫だ、と言ってまた頭を撫でてくる。その笑みを見てほっと安心できたのは、ぬくもりが頭の上にあるから。これが所謂相乗効果というやつなのだろうか。

「・・・さて。」

トントント

リノワールの笑みが一瞬にして消え、無表情を威嚇している狼たちに向ける。それと同時に左足で何かの合図のように二回地面を鳴らした。

その瞬間、ゾワアッと彼の影から無数の蛇みtainな形をしたものが出てきて、それが逃げる隙を与えることなく一斉に魔物たちに巻きつき始める。それからものすごい力でどういう原理なのかは分からないが、魔物たち自身の影に引きずり込み始めたのだ。

ーゴキヤツ、メキメキツ、メキツ・・・

少し離れたこの場所からでも、そのきつく巻かれた蛇が魔物たちを押しつぶそうとする骨が軋んで折れる音が生々しく聞こえてくる。

「・・・ーッ」

魔物は悲鳴とも似つかない声を上げながら一匹残らず影の中に引きずり込まれていく。すると蛇のような形をした影も地面に溶け込むように消えていった。

「・・・。。。」

「・・・どうした？」

「・・・あつ・・・何でもないよ。大丈夫。」

気がつけばもう魔物は何処にもいなかった。唯広大な草原がそこに何事もなかったかのようにあるだけだ。

急に彼の声が聞こえてきて現実に引き戻されて、そう気がついた。

「・・・怖かった、のか？」

「・・・え？」

服を掴んでいる手が小刻みに震えていた。

彼の表情が悲しげに歪む。

「あつ・・・ちがつ・・・違、う・・・よ。リユノワールが、闇が怖かったわけじゃなくて・・・。えつと・・・あ・・・う・・・」

言葉が全く出てこない。

彼のその悲しげな表情を見ていたら何かが心の中から込み上がってきた。

視界が段々とぼやけてくる。ぼーっと顔が熱くなつて、頭の中では先ほどの光景が映し出される。口がパクパク金魚みたいに動くだけで、肝心の声が全然出ない。

「・・・アキ・・・大丈夫だ。もう・・・怖くないから・・・。」

彼は目線を合わせるようにしゃがんで、優しく微笑む。

普段は無表情なのに、時々ふいに感情を露にする彼。それを見ると私は何故か嬉しく思うのだ。

それなのに彼が怖いなんて、思うはずがない。思ったこともない。
・・・ないのだ。

「・・・うん。ごめんねって、ほわっ!？」

一瞬ふわっと抱きつかれたかと思うと、その勢いでお姫様抱っこされた。

「な、何で・・・？」

「・・・なんとなく・・・？」

（何故になんとかでお姫様抱っこに・・・？）

それでも今は彼のぬくもりに触れていられるのならこれでもいいかな、と思ってしまった。もう既に何回もお姫様抱っこされている所為か、羞恥心がなくなってきたしまったのも私がこれ以上何も言わずにお姫様抱っこされている原因のひとつなのかもしれない。

（・・・慣れって恐ろしい・・・。）

第4話 終わり

第5話 魔法の効果は毒色風味！？

魔法と言えば？

例えば火。呪文を唱えて手から火の玉が相手に向かって飛んでいく。例えば風。かまいたちみたいなのがでて、大木なんかもスパッと切れてしまったりする。

例えば回復。何の属性が分からないけど、多分風か水か・・・光なんてのもあるのかもしれない。なんか手から癒しの光々みたいな靄が出てきて怪我を治すことが出来たりする。

例えば土。地面から自分を守る盾を出したりできてすごい便利・・・なのかもしれない。

普通だったらこういうようなことを私だったら連想する。いや、私だけじゃない。恐らく殆どの人が上記のようなことを連想するのはないのだろうか。

「・・・・・・・・」

ーしゅううううう・・・

今現在、私の目の前には鶏の形をした魔物が居る。もっと細かく言えば体長2mくらいある巨体を草原に横たわらせている。そしてもっと正確に状況を説明すれば、この鶏もどきはいさつきまでびよんぴよんとこの広大な草原を駆け回っていた。天国に旅立たれてまだ間もない。つまり私の目の前にあるその巨体は今では単なる肉の塊だ。

.....—

私の目はその魔物の死骸に向けられている。そしてリユノワールの視線もその死骸に向けられている。勿論、「やった！もしかして私皆の注目浴びてる！？超嬉しい」なんてもう既に天国に旅立っている鶏もどきが嬉々として喋るはずも無く、その場は私にとつてすごく精神的に辛い沈黙に支配されていた。

何故このような状態に陥ったのか。それは今から約30分前の私と彼の会話から始まる。

「ねえ、リユノワール。そういえば私って魔法が使えたりするのかな？」

「……？……ああ、そういうことか。」

私の質問に対して彼は眉根をぎゅっと寄せる。それから一人で納得したように頷いて普段の無表情に戻る。
何がそういうこと、なのだろうか？

「……俺と契約したことによって必然的にアキも闇属性が使えるようになる……はず、だが……」

歯切れ悪そうに彼は言う。

私は不思議に思っただけで真上にある彼の表情を見る。なんとも言えない表情で私を見つめるリユノワールの姿は、なんだか普段とちぐはぐな感じがして見ていて面白かった。勿論顔には出さないけど。

「……異世界人が魔法を使えるかどうかは、分からない。」

ああ、そういうことか、と私もつい彼と同じような微妙な表情になる。

（……そうだよな。だって、私はこの世界ではイレギュラーな存在、なんだから。）

本当だったら此処に存在していなかった。この世界があることも知

らずに、もし元の世界に居たとしても幸せに暮らせるかは分からないけれど、多分普通に人生を終えていくはずだった。

はずだったんだ。

「・・・アキ？」

「あつ、うつなんでもないよ。うつん・・・でも魔法、使ってみたいなあ・・・」

多分魔物と遭遇したときに唯一対抗できる手段が魔法だと思う。よく異世界トリップすると体力上がっていたり、何かしら能力がついていたりする、という話を小説で読んだりする。私はそういうものだと思っていたのだけれど実際はそんなことはなく、私の体力が増えたり能力がついたりすることはなかった。現実問題そう簡単にいかないものだとは私は痛感したわけだが、せめて魔法だけでも使いたい。

その一心で冒頭の一言を言ったわけだったのだが、どうやらそれすらも危ういらしい。

「・・・そんな顔、するな。大丈夫だ。アキならきつと使える。」

私が考えていることが分かったのか、彼はまるで影に映える木漏れ日のような微笑をふつと零した。

「ありがとうつ。リユノワールがそう言ってくれと何でも出来る気がするよ!」

「!」

—ぎゅっ

「え？ちょ、リュ、リュノワール・・・？／／／／」

彼に笑顔に向けた途端、目を大きく見開いたリュノワールは何を思ったのか両腕を交差させて私を抱きしめていたのだ。

一瞬黒が視界を支配する。サラツと彼の美しい髪が私の頬を優しく撫で、私の肩に顔を埋めているリュノワールの表情を覗き見ることは出来なかった。一体今彼は何を思って私を抱きしめているのだろうか？

「・・・えつと・・・リュノワール・・・？」

「・・・大丈夫。アキは魔法が使える。」

そう耳元で呟いて彼は私をそつと地に下ろした。妙に耳元が熱くなっているように感じるのは決して気のせいではないのだろう。彼のその言葉がやけに艶っぽく聞こえたのだ。

（・・・うう／／／／何だろう・・・？こんな初めてだよ・・・？別に春ちゃんに耳元で話されてもこんなこと思わなかったのに・・・なんでだろう・・・？）

首を横に振って取りあえず今はこのことは忘れることにする。今は魔法についてだ。

「えつと、どうすれば魔法を使えるの？」

「闇に対するイメージを膨らませて、それを体の外に出す・・・よ
うな」

「・・・ような・・・？」

「そんなかんじだ。」

「・・・そんな、かんじ・・・！？」

彼の言っていることが理解できない。抽象的すぎてどうやればいいか説明になってないことに彼は恐らく、というか絶対気づいていない。

これではどんな風に使えば良いのか分からない。よくある定番のRPGでは手から火の玉を出しているイメージで定着していたりするのだが、形を持たない闇に対してもこんなイメージの持ち方で通じるのだろうか？

「こんな感じで、こうだ。・・・そしたらこちら辺がこんな感じになるからそれをこう外に出せばいい。」

（指示語のオンパレードでリユノワールが言いたいことが全く分からない！！）

「・・・あの魔物に向かってやって見たらどうだ？あの魔物はこちらが攻撃しない限り攻撃してこないから安全だ。」

彼の指差す先には鶏をでかくしたような何かがつしのつしと我が物顔で草原の上を歩いていた。先ほどの狼の形をした魔物に比べると断然こちらのほうが可愛く思える。

たとえば、体長2mの鶏だったとしても、だ。

「・・・う、うん。」

（なんかこれはこれで見ていると可愛さがだんだん増してきて、攻撃していいものなのか迷ってくるなあ・・・。それにリユノワールが言っている意味も理解できないし・・・一体どうすればいいんだろっ？）

鶏に一体何をすれば？というか闇の魔法ってどんなの？リノワールがやっていたような影を操作するとこなんて私が出来るとは思えないし、でも闇属性の魔法といったら先ほど彼が使っていた魔法しか思い浮かばなくなっていた。先入観というものはなかなか抜けないものなのだ。

（うーん・・・闇っていえばやっぱり黒っぽいイメージしか浮かばないよ。後は、禍々しいかんじ、とか・・・？・・・もう自棄だ！）

リノワールが言った言葉になるべく沿うように、私は体の中に感じる温かいものを体の外に出すようなイメージでやってみた。

するとその瞬間、体の中のその温かいものがごっそりと削られていく感覚とともに、鶏もどきの体の周りにゆるく半透明の鎖が巻きつけられる。そしてそれはフワッと溶け込むように鶏もどきの体の中に入っていくのが見えた。

ービキッ

鶏もどきはビクッと体を大きく痙攣させる。それ以降、鶏もどきはピクリとも動かなくなってしまった。恰も石化してしまったかのよう。

「え・・・？」
「・・・ほう。鎖の呪縛か。・・・ん？それに薔薇の棘も付加されている・・・。いきなり素人が二つの魔術を同時に展開するとは・・・。」

感嘆の声が背後から聞こえてくる。

私には魔法が失敗したようにしか見えなかったのだが、どうやら彼の反応を見るに成功していたようだ。

「えつと・・・あれで魔法がかかっているの？」

「ああ。・・・しかしここまでだとは・・・これも異世界人故、か？」

「え？」

彼の台詞の後半は呟くように言われたので聞き取ることが出来なかった。

―ズドーンッ

何の音かと思ってその音がした方へ目を向けると、先ほどまで石像の如く固まっていた鶏もどきが嘴くちばしから泡を吹き出して倒れた音であった。あまりの巨体が倒れたので辺りに土煙が舞っていた。嘴から泡を出している姿を見ると、今まで可愛いと思っていた気持ちがウソのようにすっとなくなっていくのが自分でも分かる。あれはグロイ。

「毒が回ったのだろう。・・・なんというか、どんな想像イメージをしたらこんな魔術になったんだ・・・？」

「・・・・・・。」

・・・なんでこうなったんだろう？なんでこうなったのかな・・・？

そして冒頭に戻る。

心なしかリユノワールの声が震えているような気がする。それに見間違いでなければ顔も青くなっているような・・・？

彼が言うには、私が展開した魔法は鎖チェインの呪縛バインドというもので、相手の動きを一切封じる魔法らしい。それに加えて私は知らず知らずのうちに薔薇ローズの棘ボイスンという神経に作用する毒を付与したようで、その毒の量が鶏もどきの致死量を軽く上回ってしまったためにこんなふうになった、らしい。付与した魔法は本来こういう使い方をするための魔法ではなく、相手を痺れさせるための魔法らしいが、どういうわけか効果が変化して相手に作用したようだ。

(・・・あれ？・・・私、こんな想像、した・・・？)

「これって、闇、なのかな・・・？」

「完全に闇属性だ。・・・こんな恐ろしい魔術、闇以外に何が・・・？」

私がぼそつと言った言葉に対して彼は真顔で聞き返す。

「あ、うん・・・。そう、だね・・・」

それに対して私は何も言えず、鶏もどきに改めて視線を向けた。

「・・・本来、お前が使った魔術はどちらとも援護系の魔術のはず、なんだが・・・？」

「・・・うん。」

褒めてるのかそれとも貶しているのかどっちか分からないその曖昧な彼の返事に私は項垂れる。何だろつかこのなんとも言えない微妙な気持ち。感無量というかなんというか・・・。

（・・・あれ・・・？もしかして魔法ってこんなものばかり・・・？）

むやみに魔法を使わないことを心に決めた私だった。

第5話

終わり

第5話 魔法の効果は毒色風味！？（後書き）

その後。

—ぐうううううう…

「ねえリユノワール、これって食べられるのかな？」

「悪いことは言わんからやめておけ。というか頼むからやめてくれ。」

—しゅうううううううう…

「・・・そつか。・・・お腹すいたなあ・・・。」

これを見てまだ食欲がある彼女の神経の太さに感心するように彼女の後ろで頷いているリユノワールだった。

第6話 忌色信仰（前書き）

此処から急展開していく・・・はずですが・・・。
第6話更新しました！

第6話 忌色信仰

「闇髪に売る品物なんかひとつもないよ！帰ってくれ！」

「うちの店に近寄らないでくれ！不幸がうつる！」

「すまないがお前さんに売れるものはないのじゃ。早々にこの町から去ってくれ。」

―ボタンツ、キイ、ボタンボタンツ

「お母ちゃん！あの人の髪・・・」

「近づいちゃ駄目よ！不幸がうつるし穢れるわ！さあ、早く帰りましょう！」

―タツタツタツタ・・・

「・・・？」

今から約5分前くらいに私たちはようやく町に着いた。

取りあえずお腹が背中とくつついちゃったよ！と先ほどから主張していたので、私は食べ物を探そうと町の中を歩いていた。因みに食べ物を買うお金はリユノワールが持っている、ということだけで今だけ出してもらったことにした。勿論後できちんと返すつもりだ。

しかし町を歩いていると、私が通った場所にある店は悉くボタンボタンツと扉を閉めていくのだ。道端を歩いている親子に目を向ければ、その視線を避けるように身を縮め早足で通り過ぎていく。時には恨みがこもった目で睨まれることさえあった。

（・・・私、何かしたのかな・・・？）

一体何故こういった状況になっているのか、全く理解できない私であった。

たった5分前とは違って、この短時間で町は閑散と、まるで廃れているような雰囲気になってしまった。人一人みることすら叶わない。

「・・・リユノ。この格好がやっぱりいけなかったのかな・・・。」

やはり布一枚がいけなかったのだろうか？この格好は流石にまずいかと思わなかったわけではなく、寧ろ背徳感を感じていたわけなのだが、傍から見ればこの格好はマントに見えなくもない。誰がこの下は真っ裸、だということに気がつくのだろうか。

このあからさまに町の人に避けられている原因が薄々この格好のことではない、ということは分かっているもののそれ以外に思い当たる理由が見つからなかった。

「・・・アキ。お前の所為じゃない。・・・俺の不注意だ。」

リユノワールは眉根を寄せて、不機嫌な表情を露にしながら深いため息をつく。

「不注意？どういうこと？」

「大抵の人間は黒を嫌う。忌色として、な。・・・黒は闇、暗、不幸、死などを連想し、良くないものと呼び起こすと人間の間では昔から言われているのだ。」

たしかに一般には黒にいいイメージはあまり持たない。私は黒が嫌いなわけではないのでそういうことはあまり考えたことはないが、世間一般では黒は葬式のときに着ていく服の色などと良くないことに使われることが多い。だが、私の世界では黒が嫌われることなん

てなかった。日本人の髪と目は大方が黒で、黒色というものは普段から身近にあった色でもある。

それがこの世界では忌色として扱われているらしい。

でも、黒が不幸を呼ぶ？それは何かおかしい気がする。今まですれ違った町の人たちの中には黒い服や小物を身につけていた人だって少なくなかった。それなのに何故髪と目の色はタブーなのだろうか？

「・・・勿論黒が不幸を呼ぶ、なんてのは後付で大嘘だ。」

「え？じゃあなんで・・・？」

一瞬躊躇う素振りを見せてから、私の瞳を覗き込むように見つめる。それから重い口を開くように話し始めた。

「黒の色素を持つ人間は滅多に生まれることはない。しかし何十年に一人、そういう黒髪の子供が生まれたりする。・・・髪も目も黒というのはなかなかいるものではないがな。そして、その子供が生まれた年には必ずといっていいほど災害が人間を襲った。」

災害といってもひとくくりでは言い表せない。大規模な山火事、飢饉、日照りによる水不足、洪水、大嵐、謎の疫病・・・とリュノワールは例を挙げていく。

「それから何百年も経ったあるときを境に、黒の色素を持って生まれた子供は災いを呼ぶ、という訳の分からない概念を持ち始め、人間は黒の色素を持って生まれてきた子供を殺すようになった。・・・たとえばそれが自分の生んだ子供であっても・・・な。」

「・・・殺す・・・？母親が子供を・・・！？」

リュノワールの首が縦に振られるのを見て、この話が現実にあるこ

となのだと私は突きつけられたような気がした。

「・・・まあ例外というのも居て、殺されなかった子供もいないことはない。だが、そういった子供は一生牢獄という名の部屋から出してもらえず、肉体は顕在していても精神が死んでいった。」

それでは死んでいると同義だ。

生きながらに死んでいる。まるで、生きた死体【リビングデッド】だ。

（・・・私と同じ、黒を持った人。）

「アキ。・・・あまり気にするな。殺された子供は何を思ってももう帰ってこない。」

知ってる。

「アキが気に病むことではないんだ。」

分かってる。

「・・・死んじゃったらもう私を苦笑しながら朝起こしてくれることも、いつてらっしゃいつて手を振ってくれることも、出来ない。・・・もう、してくれない・・・」

「・・・アキ？」

「ーッ！・・・あつ、えつと・・・どうしたのリュノ？」

気がつけば私の顔を覗き込んでいる彼がいた。無表情からほんのり漂ってくる心配しているような雰囲気。それを目に映すと、私は彼を心配させないように笑顔で彼の目を見つめた。恐らく先ほどの話

で私が思いつめているのではないか、と心配してくれたのだ。

「・・・大丈夫、か？」

「うん。大丈夫。ありがとう、リユノ。」

にこつと私が笑えば彼は少しだけ表情を和らげて、私の頭をぼんぽんと優しく撫でるのだった。

そんな時、何処からか急いでいるのか、ぱたぱたと走っている足音が聞こえてくる。

よく見ると一人の男の子、まだ5、6歳くらいだろうか。その男の子は抱えるほどの大きなガラス瓶を両手に持って、こちらに駆けてきているところだった。ガラス瓶にコルクで蓋をしてあるわけではなく、開いた口からはその子が揺れるたびに中に入っている透明の液体が少しずつ零れて道に点々と黒い染みを作っていた。

その男の子が近くに来るにつれて、その子の表情は暗く、見ても私たちが良くは思っていないような顔をしているのが分かる。そして私たちから1mくらい離れた地点でピタツと足を止めた。

「えっと、どうしたの？迷子？」

「・・・・・・・・。」

男の子は口を閉じたまま一向に開く気配がなかった。一体何をしにきたのだろうか？もしかして私たちに水を持ってきてくれたのだろうか？

そんな楽観的な希望を持ったのがそもそもの間違いだった、と気がついたときにはもう遅かった。

―バシャアッ

「え？」

一瞬何が起こったのか理解できなかった。
呆然としていると目の前の男の子は口を開いて大声で叫んだ。

「話しかけるなこの悪魔の化身どもめ！！この聖水でも食らえ！！」

―バシヤンツ

「・・・あ・・・。」

水。

この覚えのある感覚。体中が濡れて服が張り付くような・・・不快な感覚。

(・・・やめて)

「・・・格の違いの分からない若造が・・・。。。。。。っておい！アキ！？」

「聖水が効いた！！やっぱりお前は悪魔なんだな！この悪魔！さっさとこの町から立ち去れ！！」

―バシヤンツ

(やめて・・・！！お願い・・・っ！！)

膝に、いや体中の力が抜けてその場に崩れ落ちるように倒れようとした私を抱き寄せるようにリュノワールは受け止めてくれた。彼が私を庇って水から守ってくれているのは分かったが、彼が何かを言うように口を動かしているのが見えても、何を言っているのか全く

分からなかった。

今、私の目に入っているのは彼の着ている服の色。まるで目を閉じているような感覚に襲われるが、私の脳裏に焼きついたあの羽散る水しぶきが消えることはなかった。見たくないのに、目を閉じていても見える。聞きたくもないのに跳ね踊る水の音が耳に焼きついたように離れてくれない。感じたくないのにいつまでも体中に感じる水に濡れたこの不快なかんじ。

もう自分でも何かなんだか分からなくなってきた。

「・・・いや・・・っ、やだっ・・・やだよっ・・・！！水が、怖いっ・・・。」

「アキ！？落ち着け！！・・・ほら、水はもうこない。大丈夫。・・・アキ。落ち着け。」

ぎゅっと抱きしめられているのが分かる。

「・・・。。。」

今、リュノワールが何か言ったような気がした。でもそれは私に向けてじゃない。とても冷たい声。

―ガシャンツ

それと同時にガラスが割れたような音がして、誰かが慌てて走っていく足音がした。そしてふいに頭の上にぬくもりを感じる。

「・・・アキ・・・大丈夫だ。・・・もう大丈夫。」

優しく耳に響く彼の声。私を包み込む温かい体温。視界に入る漆黒

の髪。大地を照らす二つの銀色の月。

「・・・リユノワール・・・怖い・・・水は、怖いッ・・・」
「もう水はない。・・・安心しろ、アキ。俺は、此処にいる。」

彼がそういつて微笑みを浮かべる。その表情を見ると、何故か私は心底安心してしまう。水のことなんか忘れて、彼の微笑をずっと見つめていたい。見つめていれば、きっと、ずっと安心していられるから。

すると急に以前にも感じたような急な眠気が私を襲う。その眠気に抗うことなく、それに従い目を閉じた。

S i d e リユノワール

「すー・・・すー・・・」

規則正しい寝息を立てているのを聞くに、取りあえずは一安心して良さそうだ。安眠魔術をかけたからには安眠していないとおかしいのだが、先ほどのアキの取り乱し方は異常だった。どうやら彼女には何か水に対するトラウマがあるようだ。

目は虚ろ。今にも壊れてしまいそうな表情で、水。ただその一点を見つめていたのだから。

水に濡れて不快に表情を歪ませている彼女の顔を手で拭ってやると安心したかのように一瞬微笑んでからまたすっと元の表情に戻っていった。それを見て自然と笑みが零れる。

「・・・・・・・・。」

それから一転して無表情になり、先ほどの少年が走り去っていった方向を怒りの籠った瞳で睨み付けるように見つめる。

（・・・消すか・・・？町ごと。）

アキにしたこの仕打ち。今更どう謝られても何をしてきても許す気は一ミリもない。もっともこの町の連中がそんなことするはずがないが。

潰すか消すか闇に沈ませるか。どんどん黒い思考に染まっていく自分を止めることは出来なかった。

そんな物騒なことを頭の中で考えているとこちらに近づいてきている人間の気配を感じた。先ほどの少年の類だったら……。

冷たい思考が頭を過ぎる。

それから数十秒後、何処からか姿を現したのはフードで顔を隠しているいかにも怪しい雰囲気が漂う人物だった。ここまで急いで走ってきたのか乱れている息がこの静まりかえった町の中に響いていた。

「あ、安心して下さい。別に害を加えようとしているわけではありません。もし良かったらうちに来ませんか？その少女をきちんとしたところで寝かせてあげた方が良くと思うんですが？彼女の顔色からして大分疲労しているように思えます。」

「……何を企んでいる？」

忌色持ちの二人を家に招きいれるなんて正気の沙汰ではない。一体こいつが何を考えているのか、フードで表情が隠れていて読み取ることが出来ない。

すると疑っていることがフード越しにでも伝わったのか、慌てたように両手を顔の前で振りながら言う。

「特に何かを企んでいるわけじゃありません！……言っても信じてもらえないのかもしれませんが、絶対に危害は加えません。我が神、リクラシニア様に誓って約束は守ります。」

「……リクラシニア……異教徒か。忌色崇拝の……。」

“リクラシニア”。

忌色崇拝の宗教団体の名前である。そしてそれと同時に彼らが崇めている神の名前でもある。リクラシニアは漆黒の長い美髪を持ち、

何事も見透かしてしまうといわれている黒曜石の瞳、そして背中に生えている二対の黒い翼を持つ女神だ。勿論忌色を崇拝しているため国から認可を得ておらず、異教徒扱いで弾圧されることもある。そんな狂った思想を持つやつらの根城に入ったらアキにどんな危険なことが起きるか分からない。そんな危険に彼女を晒したくは無かった。

「お前らは何をするか分からん。」

「その子の為を思うのならベットに寝かせて休ませたほうが良いかと。それとも何処か他に当でも？」

「……。」

「沈黙は肯定と取ります。着いてきてください。」

何も言い返せない。

勿論当てがあるはずもなく、水に濡れて寒そうにしているアキをこのままにしておくわけにもいかない。もしかしたら風邪をひいてしまふ可能性もないとは言い切れないのだ。

ここは黙って着いていくしかなさそうだ。前を歩いている気味の悪い人物の後を一定の距離を保って歩いていく。

恐らく黒髪黒目を持つているこの宗教では非常に貴重な存在であるアキを、安易に傷つけるようなことはしないだろう。だが、何か裏がある。警戒するに越したことは無い。

（……もし少しでもアキに手を出すような真似をしようものならば躊躇はしない。）

「……消してやる。」

Side Out

終
わ
り

第
6
話

第7話 責任の取り方は色々あるよね？（前書き）

今回はちょっと長めです。

第7話 責任の取り方は色々あるよね？

「・・・あつ・・・や、れは・・・ッ！！・・・ち・・・ざとじゃ・・・」

（・・・うん・・・なんか騒がしい・・・誰だろう・・・？リユノワールの声・・・じゃない・・・。）

誰かが大声で叫んでいるのを聞いて目が覚める。

上半身だけ起こした私の前には、私に背を向けて仁王立ちしているリユノワールが居た。顔が見えないからなんとも言えないが、彼から嫌なかんじのする刺々しい雰囲気が出ているのは分かる。

「・・・貴様、死にたいのか？」

「だから違うんですってば！！誤解です！完ッ全に誤った解釈の仕方してます！！」

再び大声で叫ぶように話す人の声が耳に入ってくる。なにやら相当焦っている様子が窺える。

それにしてもどうしてリユノワールはこんな刺々しいオーラを出しているのだろうか？この叫んでいる人に何か関係があるのだろうか。

リユノワールはあまりに憤然としている為、私が目を覚ましたことに気がついていないようだ。

（それにしても何の言い合いをしてるのかな？）

リユノワールが対峙している相手を見たくて、体を横に少しだけ傾ける。その瞬間、焦げ茶色の双眸とぱっちり目が合う。

「ッ！！／／／／」

その少年、いや青年だろうか。その人は声にならない悲鳴のようなものを上げると同時に青かった顔を茹蛸のごとく真っ赤にして、フイツと勢いよく明後日の方向へ顔を背けた。

（・・・あれ？もしかして目を逸らされた・・・？私、何かしたかな？）

初対面で顔を背けられたことに地味にショックを受ける。私はこの状況が全く飲み込めずに、縊るように目の前に立っている彼の大きな背中を見上げる。すると私が起きたことにやっと気がついたのか、雰囲気が少し柔らかくなった。

「アキ。・・・起きたのか？」

「う、うん。・・・リュノ、一体どうしたの？そこにいる人は？」

チラッと青年に目を向けるとまた目が合い、スッと逸らされるのに再びショックに感じながらリュノワールに聞く。すると彼はまた刺々しい雰囲気纏って怖い笑みを浮かべる。

「大丈夫だ。心配するな。・・・すぐにアキの前から消してやるから・・・。」

「だ、だから違うんですって！！信じてくださいよ！！」

今にも泣きそうな表情で懇願するように叫ぶ青年。よく見ると膝がカクカク笑っていた。何故か無性にその青年が可哀想に思えてきた。

「えっと、リュノ？その人のこと、なんだか知らないけど許してあ

げたらどうか？」

青年を庇うような台詞がつい口からするりと出てしまう。

すると先ほどまで青年は私と目を合わせれば即座に逸らしていたのに、今現在は私のことをまるで救世主でも見るようなきらきらした目つきで見ている。

しかしリユノワールは首を横に振る。それからとんでもないことを彼は静かに叫んだ。

「こればかりはアキの言うことでも聞けない。こいつは……こいつはあるところかお前の裸を見たのだぞ！？」

「へ？」

一体何ノコト？裸？イツ？……誰ガ何ヲ見タツテ……？

頭の重さに耐え切れなかったようにコテンと首を傾げる。それから何気なく、本当に何気なく、だ。胸に手を当てた。

――ぶによっ

「……？」

（……あ、れ？布の感覚がない……？どうして？）

恐る恐る視線を下にやる。そしてものすごく後悔した。私は見事に、真っ裸だった。

「――ッ！？／／／／」

（何でっ！？私何で裸！？ぬ、ぬ、布！！布は何処に行った！？）

私が横たわっていたベットの他にも、その近くの床にも見当たらない。布は一体何処にあるのだろうか。もう何がなんだか分からなく羞恥心が何処からかこみ上げてきて、頭が熱くなり真っ白になる。何も服を身につけていないという罪悪感、知らない人に見られたという恥辱感が合わせ混ざって最高に最悪の気分だ。いつから私の涙腺はこんなに緩くなってしまったのだろうか、するりと涙が出てくる。泣いているのをリユノワールに知られたくなくて声を出さないように堪えるものの、喉からまるでアヒルが鳴いているかのような不恰好な泣き声が漏れてしまった。

「うぐっ・・・ひつく・・・」

「殺す「わあああああつ！！ごめんなさいっ！！でも信じてください！！態とでは、決して態とではないんです！！（大事だから二回いいました）」

後ずさりしながらブンブンと勢いよく振っているその両手にはあの布が握られている。

誰がどう見てもあの青年がやったとしか思えない。勿論私も例外に漏れていない。

その布が物語っているのだ。“この青年がボクを君から剥ぎ取ったんだよ”と。

「お嬢さんまでそんな疑わしそうな目で見つめないで下さい！無実です！冤罪です！」

「・・・もう貴様が有罪だろうが無罪だろうが冤罪だろうがどうでもいい。アキを泣かせた時点で貴様が死ぬことは確定事項なのだからな。」

「それ絶対考え方間違ってますから!!」

顔を真っ赤から真反対の真っ青に変えながらも突っ込むべきところを突っ込むのは流石と言うべきか。なにやらこの二人が漫才をしているように思えてきてしまっただけで自然と笑みがこぼれた。

「ふふっ。二人とも面白すぎっ! あはははっ、いいコンビだね! . . .
・ってあれ? 何か私、変なこと言った、かな?」

急にしんと静かになったなあ、と思ってみれば二人して呆然とこちらを凝視していた。そんな啞然となるようなこと言った覚えはないのにだ。

するとリユノワールはフツと苦笑(気をつけてみない無表情に見える)をしながら青年が握っていた布を乱暴に奪い取ると、フワツと私に優しくかけてくれた。それから青年のほうに向き直る。

「. . . 今回はアキに免じて命だけは見逃す。 . . . 次はない。」

後姿なので彼が今どんな表情をしているか私には分からない。ただあの青年の怯え方からして相当怖い顔をしているのだろう。台詞にも殺意が微かにこもっているような気がしないでもない。

この青年には気の毒だが、リユノワールが私のために怒ってくれている、ということが実は嬉しかったりする。私もリユノワールが大変な目に誰かに合わされたらリユノワールを守ろう、と誓ったのだった。

「そっぴいえば私、何でこんなところで寝てたのかな?」

気がついたらこのベットに横たわっていたのだ。そして冒頭から現在に至るわけなのだが。

リュノワールの銀色の瞳が一瞬鋭くなる。

「・・・覚えてない、のか？」

「・・・？そう、なのかな？この町に入ってきたところまでは覚えてるんだけど・・・。それからこの人は？」

ふと嫌な予感がして、私は知らず知らずのうちに話題を逸らしていた。

何気なく青年のほうに視線を向けると、先ほどのように目を逸らさなくなつたもののほんのり顔を赤くする。

「此処は私の家です。貴女が大変疲労しているように思えたのでうちのベットで寝かせるといいですよと招いたのです。疲れは取れましたか？」

（この人いい人・・・かも。）

裸を見たのは頂けないが、この青年は悪い人ではなさそうだ。見ず知らずの人を自分の家に招く、なんて普通の人はいないだろう。まるで協会に仕えている神父さんみたいだと私は思った。

「はい。疲れはすっかりとれてとっても気分がいいです。ありがとうございます。」

「それは良かったです。」

物腰が良さそうな柔和な笑みを浮かべる青年。

（・・・？）

私は彼の笑みが作り笑いに見えた。

もしかしたら私の単なる気のせい、なのかもしれない。

「・・・あつ。そういえばリュノ。私この町でちゃんとした服を買いたいなあって思ってたんだけど・・・。」

「・・・この町じゃないところで買ったほうがいい。・・・それに長居は無用だ。」

リュノワールの表情に一瞬影が差す。それに疑問を持ったものの、何故か聞いちゃいけないような気がして首を縦に振る。

「そつか。リュノがそう言うんなら次の町まで我慢するね。」

正直言えば今回のようなこともあつて、一刻も早く“脱・布一枚”をしたいのだ。裸を見られたのが青年のような温和な人だったら良かったものの・・・って。

「どうして布を貴方が持っていたんですか？」

まさか貴方が・・・と私が続けようとしたら、青年はせつかく落ちて着いてきた顔色を真っ赤にしながら「違います！」と何回も繰り返す。

「貴女が水に濡れているようだったので、布の下の洋服も濡れていたら風邪をひいてしまうな、と・・・。」

「え？・・・私が、水に濡れて、た？」

水・・・？

「アキッ！もう大丈夫だから・・・。」

「・・・あ・・・。」

（・・・そうだ。私、あの時あの男の子に、水を・・・かけ、られたん、だ・・・。）

一度思い出してしまえば芋蔓式にどんどん思い出す。記憶だけでなく、水をかけられた感覚まで。嫌というほど鮮明に。

「しつかりしろ、アキ。」

「・・・あ、うん。・・・だ、大丈夫、だよ？」

「・・・無理するな。声が震えてる。」

気がつけばしがみつくようにリノワールの服を両手で掴んでいた。それを彼は嫌がる素振りひとつ見せず、優しく頭を撫でてくれる。いつもより荒く、だけど優しく、力強く、大丈夫だよ、と。

あれから大分時間が経っているのか、布は乾いているようだ。私は内心安堵しながら布をぎゅっと体に巻きつけるように握った。

「服が欲しいんですしたら良ければうちにある洋服あげましょうか？」

私が落ち着いたのを見計らって青年がそう提案した。願ってもない提案だったが、そこまでしてもらっては立つ瀬がなくなってしまうような・・・でも服は欲しい。

リノワールに目線を合わせてみると、好きにしろ、という雰囲気であつた。

（うーん・・・これはお言葉に甘えてもっておくべき・・・だよな？次いつ町に着くか分からないし、もらえるものはもらっておいたほうがいいよね？・・・うん、そうしよう。）

「何から何まですみません／＼／＼」

「いいですよ。ちょっと待っていてくださいね。」

自問自答した結果、服はありがたくもらうことにしました。

青年はこのベットの横にあるクローゼットの中から服を取り出して私に渡してくれる。お礼を言って広げてみると、上から被るタイプのチュニツクのようなものだった。元は白かったのだろうが少し薄汚れて薄灰色に見えなくも無い。左胸の上のところにはワンポイントで真っ白なバラのコサージュがついていた。

（・・・？これ、女の子が着るような服だね？何でこの人こんな服持つてるんだろう？）

私が黙って服を見つめていた所為か、それとも私の心のうちを読んだのか青年は苦笑しながら説明してくれた。

「私には娘が居てね。その子のお下がりなんだ。靴もお下がりであればどうぞ。」

「あ、はい。ありがとうございます」

成る程。娘さんのお下がりの洋服。

ブーツも娘さんが愛用していたのか、チュニツク同様元は白かったものが薄灰色になっている。洋服を被るように着てからブーツに足を入れてみると踵が指一本分余ってしまった。しかしそれほどブルカでもないので支障はないだろう。布はマントのように肩からかける。

素足でブーツを履いたことがない（といっても以前もブーツなんて履いたことがなかった。大体スニーカーかローファアの二択である）ので変なかんじがする。

「すみませんね、お下がりしかなくて・・・」

「いえ！もらえただけで本当にありがたいです！」

「いえいえ。こうして貴女と巡り合えたのもリクラシニア様のお導きのおかげですから。」

「・・・リクラ、シニア・・・様？」

一瞬この人の娘さんの名前かと思ったのだがどうやらそうではないらしい。

「はい。リクラシニア様をご存知ではないのですか？貴女はその美しい黒い瞳と髪、双黒をお持ちだというのに？」

たしかにリュノワールの漆黒の長髪はこの世のものとは思えない美しさを持っていると思う。今の台詞はリュノワールに向かつていったのだろう。・・・多分。だって私の髪はリュノワールのとは程遠いぱさぱさだし。

（・・・でもあれ？リュノワールって瞳はたしか・・・銀・・・？）

ぱつちり青年と目が合う。

あれ？もしかしてさっきのは私に言ったのだろうか？と今更になつてその疑問が確信へと変わっていく。

「貴女のような双黒の人に会うのは初めてです。・・・本当に美しいです。」

「・・・えっと、リュノワール彼が？」

「いえ、貴女です。（断言）」

（私！？）

「貴女さえ良ければ、私たちリクラシニア教の教祖様に会って欲し

いのですが・・・。」

「・・・それがお前の目的か・・・。」
「リユノ？」

リユノワールは小さく舌打ちをすると、いきなり無表情を崩して青年に殺気のこもった視線をやる。それからふうつとため息をついてこちらを向く。すると頭に彼の声が唐突に響いてきた。

『アキ、聞こえるか・・・？』

（！！リユノ？これはテレパシー？）

『・・・まあそんなところだ。それより此处から早急に脱出したほうが良い。リクラシニア教は忌色崇拜の中でも力を持っている非常に危険な奴らの集まりだ。・・・もし狂信者にでも捕まったらただでは済まないぞ』

「え・・・？」

「？どうかしましたか？」

急に声を上げた私に青年は怪訝な表情をして聞いてくる。それに対して（引き攣った）笑顔で答えた。

「あつ、いえ。なんでもありません。」

（危なかった・・・。えっと、それってどういう意味？）

『最終的に祭り上げられてリクラシニアの生け贄にされるのがオチだ。』

（生け贄！？）

自分でも顔が青ざめていく。生け贄が具体的にどういうものなのかは分からないが、自分の命が危ないことくらいなら私でも分かる。

「あの、一応聞きますけど、私は普通の人間ですよ？その、教祖様？に会って・・・どうするのですか？」

「ええ。存じていますよ。ただ双黒は非常に珍しく縁起がいいので、教祖様にお会いになってもらいたかっただけです。嫌なら無理意地はしません。」

聞いたら即座にすらつと返してきた返答に果たして裏があるのだろうか。でもリユノワールが言ったことも嘘だとは思えない。

（・・・この人、そんなこと考えてないんじゃないかな？悪いかんじはしない・・・と思う。それに服ももらっちゃったし、これくらい頼みだしたら聞いてあげるのが妥当、なんじゃないかな・・・？）

『・・・はあ。本音はそれか。・・・アキ、こんなことで命を危険にさらしてほしくはないんだ。他にも礼の仕方はあるだろう？』

彼が本当に私のことを心配してくれている気持ちが伝わってくる。それはすごく嬉しかったが、私はこれ以外にこの人にお返しができる方法なんて思いつかないのだ。

（・・・うん。だけど、私を助けてくれたし・・・お願い、リユノワール。）

懇願するように彼を見上げる。すると数秒沈黙を貫き通していた彼だったが、ため息をつくと共に微かに首が縦に振られるのを確かに見た。

（・・・ありがとう、リユノワール。）

「分かりました。会います。」

「そうですか！ありがとうございます。教祖様もきつとお喜びになるでしょう。」

笑みを浮かべながら頭を下げる青年。

「・・・？」

「アキ？・・・どうかしたか？」

私が不思議そうな顔をしていたのを目に留めてリュノワールは眉を寄せた。それに対して私は首を横に振りながら、

「ううん。・・・なんでもないよ。」

と笑顔を彼に向けた。

まだ確固たる確信があるわけじゃない。

リュノワールにこれ以上余計な心配をかけたなくて、私はベットから腰を上げると彼より先にドアを開けて外に出ている青年の後ろに着いていった。

「・・・。。。」

青年の笑みは本物？それとも、

嘘？

私はまだ家の中にいるリュノワールが心配そうに私を見つめていたことを知らない。

第7話 終わり

第8話 その濁色の瞳で何を見る？（前書き）

長い間空いてしまって申し訳ないですm(_____)m

鬼の居ぬ間になんとやら、今現在母にPC禁止令を出されていてこ
うしてPCを開くだけでも命がけです；

今後監視を掻い潜って投稿しますので、どうかよろしくお願いし
ます；；；

第8話更新です！

第8話 その濁色の瞳で何を見る？

細い路地を通って数分。相当入り組んでいたので今まで通つてきた道は全くと言って良いほど覚えていない。

昔からあまり記憶するのは得意ではないのだ。自慢じゃないが日本史や生物といった暗記物の点数は毎回ずば抜けて低い。順位も後ろから数えたほうが早いし（日本史と生物に限る）、テストを返された後に必ずやる点数の数えなおし（もしかしたら先生の間違いで点数が悪いんじゃないか、と淡い期待を抱きながらやるテスト返し直後の恒例と化した作業のことである。大体的場合は間違っていないか、間違っていたとしても逆に点数が下がる場合がほとんどだ。）も間違えた問題の点数の数を数えて満点から引くよりも、当たっている問題を数えたほうが楽なのだ。それでも全体の順位を真ん中ぐらいに保てているのは国語と数学の点数がいいから・・・だと思う。英語も得意ではないが平均点をキープしているし、日本史も生物もいくら点数が悪いといっても最下位なわけでもない。この微妙な均衡が私を真ん中に居させてくれるのである。閑話休題。

そうこうしているうちに迷路のような路地を通って最終的に行き着いた場所は袋小路、所謂行き止まりだった。

「・・・壁・・・だよね？」

どうみても、誰が見ても、何処から見ても、見方を変えてみても壁にしか見えない。そこにあるのは煉瓦で出来た縦約2m、横幅1mのれっきとした壁だ。首を傾げてみてもやはり壁は壁でこれといって特に気になるようなものは見られない。

「いや、これは・・・」

しかしリュノワールにはこれが壁には見えならしい。そしてそれに肯定するように青年が微笑む。

「大丈夫ですよ。」

青年は手を壁につく。するとスツと何も障害物がないようにその手は壁の向こうへすり抜けていた。まるでそこにある壁は幻であるかの如く、ごく自然に片足も壁に沈み込んでいく。

背後から「やはりな。」という呟きが聞こえてくる。どうやらリュノワールは最初からこのことに気がついていたようだ。

「これは幻覚です。普通に通れますよ。」

そしてあつという間に壁の向こうへ消えてしまう。

こういうのを見るとやっぱり「ファンタジーだなあ」なんて思ってしまう。あれ？なんか前にも同じようなことを言った覚えが・・・なんて現実逃避していると後ろがつかえているので、少し怖いけど意を決して一気に壁の向こう側へ通り抜けた。通り抜けたときに体が浮くような変なかんじがしたけど、気持ち悪くなるわけじゃなかったからまあいいとする。

壁の向こう側は薄暗い場所だった。

四方がコンクリートのようなもので固められていて、光が入り込む余地は私が見回す限りでは何処にも見当たらない。それなのに何処からか生ぬるい風が私の足元を通り抜けていく。

ただ此処に突っ立っているだけなのに心なしか息苦しさを感じた。簡単に言えばこの場所はすごく気味悪い。この場所を拠点にしている宗教の人たちには悪いと思うが、あまり長くは居たくない場所だ。

何が私をそんな風に思わせるのかは定かではないが、とにかく教祖様と呼ばれている人に会って早くこの場から立ち去りたかった。

「もうすぐですよ。この中は今まで通ってきた路地以上に入り組んでいますから、迷わないようにきちんと着いてきて下さい。」

「あ、はいっ」

こんなところに置いてきぼりにされたらひとたまりもない。

慌てて青年の後を追う。しかし2mほど歩いたときにリユノワールが着いてきていないことに気がついて急いで駆け戻る。

「リユノ、どうかした？」

「いや、なんでもない。大丈夫だ。」

本人はこう言っているが私にはそうは思えなかった。普段なら無表情を崩すことなんてあまりないのにそれを崩して、何処か分からない虚空を見つめていたのだから。もしかしたら彼も私と同じで此処にあまり居たくないのかもしれない。ほとんど私の我儘で来てしまったようなものだ。それで彼に迷惑はかけたくない。

「・・・本当に大丈夫だ。行くぞ。」

「う、うん。」

微笑したリユノワールは優しく私の背中を押して先を促した。

この通路の所々に照明代わりの蠟燭があり、ほんのりと辺りを照らしている。途中いくつか右側左側と扉があったが、そこは素通りしていく。多分教祖様はもっと奥のほうに居るのだろう。偉い人というのは地球異世界共通で一番奥にいるものらしい。

（どんな人、なんだろう？教祖ってたしか宗教とかを始めた人のことを指す言葉だよな。・・・うん・・・全然想像つかない・・・。優しそうな人だといいな。）

『決して気は抜くな。此処は敵陣だと思え。』

後ろを振り向くと呆れたような表情で苦笑しているリユノワールが居た。苦笑しているのを見るに怒っているわけではないようだ。どちらかというところ子供の面倒を見ている親の心境、というやつだろうか。そんな雰囲気は漂っていた。

（うん。分かってるよ。ちゃんと気をつけてるよ？）

『・・・フツ。』

（今の台詞の何処かに笑う所なんてあった・・・？）

『いや、なんでもない。・・・それよりほら、逸れるぞ。』

（あ。）

前方に目を向けると、私との間が3mぐらい離れていて止まってくれている青年がこちらを振り向いていた。どうやら待っていてくれているようだ。よく目を凝らしてみると青年が立ち止まっているところはちょうど三方向に道が分かれている。

「大丈夫ですか？」

「あ、はい。ごめんなさい、すぐ行きます！」

そうして巨大迷路のような道を歩いていること数十分。今まで見かけてきた扉とは明らかに造りが違う扉に行き当たった。

大きさも普通の扉と比較してみると二倍以上あり、ドアノブも一点の曇りもない金色の金属で精巧に作られている。これは蛇……？の形だろうか。

「此処です。今の時間帯は他の信者は各部屋に籠って祈りの時間なので今は誰もいません。ですから安心してください。」

「はい。」

ギツと古臭い音を立てて、青年の両手によってゆっくりと扉が両側に開いていく。

「教祖様、入りますよ。」

返事はない。

それでも青年は少しも気にする様子もなく中へ足を踏み入れる。私とリユノワールも一足遅れて青年に続きその中へ入っていく。

そこはまるで外国にある大聖堂のような場所だった。実際に外国にある大聖堂を見たことはないものの、大聖堂といったらイコールで繋がるステンドグラスが天井に盛大に広がっていたから、私の頭に大聖堂という言葉が即座に浮かんだのかもしれない。もし此処に光が差し込んでいたのなら本当の楽園のように見えたのかもしれないが、生憎といってやはり此処にも光が差し込むことはなく、代わりに申し訳程度の装飾蠟燭が数百本、所狭しと並べられていた。それはそれで圧巻な光景だが、やはり本物の光でステンドグラスを照らして欲しかった。

そしてぼんやりとした蠟燭の火に照らされて、その中心にぽつかりと空いた空間にある台座に座っている一人の少年が目につく。蠟燭の光に煽られている所為で少年の表情は薄暗く、此処からではよく見えない。

「教祖様、双黒の方をお連れしました。」

少年に恭しく頭を下げる青年。それを何の感情も含んでいない漆黒の瞳が映す。見る、のではなく唯映した。

台座に座っている少年の腕と足は食事をしているのか疑わしくなるほど痩せこけていて、病人のような、まるで生まれてから一度も日に当たったことのないような青白い肌がやけに目に焼きつく。そしてそれに映える闇のように真つ黒な髪は手入れされていないのか、ぼさぼさで伸び放題だ。服といえるのか甚だ疑問を抱く、包帯のような細長い布を要所要所に何回か巻きつけただけの格好は不思議とみすばらしいかんじは全くせず、逆に神々しい雰囲気さえ感じられた。

(・・・この男の子が、教祖、様・・・?)

台座に座っている教祖様と呼ばれる彼は見た感じ、まだ12、13歳くらいの少年である。予想外も予想外、斜め上どころか直角になるんじゃないかというくらい想像とかけ離れすぎていた。私の想像していた教祖様というのは40歳くらいのおじさん、もしくはすごい年寄りのおじいさんだと思ひ込んでいたのだから。

「この方が我が神教、リクラシニア教の教祖様です。もっと近づいて双黒をお見せください。きっとお喜びになります。」

「あ、はいっ」

青年に手を取られて半ば強引に台座の目の前にまで引っ張られる。意外と青年の力が強いことに少し驚いたものの、台座の前にまで連れてこられると妙に緊張して驚きを通り越し一瞬頭が真つ白になる。青年は私を台座の前まで連れてくると頭を下げながら一歩後ろに下

がる。

（えっ、え！？何を、一体どうすればっ？え、えっと・・・まずは自己紹介だよね！）

自問自答して一旦頭を落ち着かせる。軽く息を吸って吐いてを繰り返してから前に向き直った。

「は、初めまして！わたし、私は葉通^{ホミチ} 昼^{アキ}ですっ。」
「・・・・・・・・。」

こうして自己紹介をしてみると、リユノワールと会ったときを思い出す。あの時は自ら名乗らずに相手の名前を聞く、という失礼なことをしてしまったが、今回は以前の反省を踏まえて同じことは繰り返さない。・・・と息巻いて名乗ってみたはいいいものの、少年は全く反応してくれなかった。眉どころか髪の毛一本もピクリとも動かさず（神経が通っていない髪の毛が動くわけがないのだが）つい勢いで言ってしまった）、無視、今風で言うシカト？をされてしまった。

「・・・・・・・・えっと・・・・・・・・えっと・・・・・・・・。」

（ど、どうしよう・・・なんで何も反応してくれないの？聞こえてないのかな？耳が悪い、とか・・・・）

何をして良いか分からず、取り合えず少年に目を合わせてみる。目を合わせてみれば何かしら反応してくれるかもしれないし、大体人は目を見れば今相手が何を思っているのか雰囲気で分かるものだ。そう思って覗き込んだ。

たしかに少年の瞳に私は映っていた。きちんと球体に浮かぶように漆黒の瞳孔に私が鏡みたく映っている。

でも、見ていない。

先ほど青年が頭を下げていたときと全く同じ。この少年は最初から何も見てない。見ていないから何も感じてない。感じてないから唯そこにあるだけの存在と化している。そう、以前リユノワールに聞いていた話と同じ、生きた死体【リビングデット】のように。もしかするとこの少年は忌色思想で被害を受けた子供のうちの一人なのかもしれない。

「……………」

「すみませんね。教祖様は無口な方でしてあまり普段からお話にならないのです。だから気にしないでください。ね？」

でももしたらそもそも何故その被害を受けた子供が宗教の教祖なんてやっているのだろう？こんな状態で半ば組織化している宗教団体を少年一人でまとめられるとはとてもじゃないが思えないし、少年がこの宗教を立ち上げたとも思えない。

「教祖様もきつと内心ではさぞお喜びになっているはずです。」

青年はそう言って優しい笑みを浮かべる。

私はまた彼の笑みに違和感を覚えた。でも今度は前みたいにぼんやりとはなく、確実にそう思える。

何で今微笑むのだろう？

少年の表情はリユノワールの無表情とは違う。本当にそこに何もないのだ。それなのに何故今青年は少年が喜んでいると分かるのだろう？なんで今微笑む必要があるのだろう？どうして少年に嘲笑うような笑みを向けているようにみえるのだろう？

心の中で次々と疑問が浮かんでは消えていくわけではなく、降り積もる火山灰のようにどんどん蓄積されていくのを感じる。降り積もっているのは雪ではなく、黒くて粉っぽい火山灰。恐らく火山灰と聞いて大多数の人はいいイメージを持たないのではないだろうか。とにかくそんなかんじのイメージが冷たく頭を過ぎた。

「貴方は一体誰を、何を見ているの？」

「・・・え？」

（・・・って私、急に何言ってるんだろう！？こんなこと口に出そうと思ってたわけじゃないのに・・・この人も何言ってるんだ？って顔してるし・・・）

青年は私を見つめる、いや凝視といったほうが正しいだろうか。穴が開くほど見つめて驚いたように目を大きく見開いていた。きつと後ろでリュノワールも驚いていることだろう。でも、一番この中で驚いているのは私、自分自身だった。

ふと口から零れた言葉は水面に大きな波紋を起こすように広がり、自分でも止めることが出来ない。

「貴方は一体何を見ているの、かな？・・・そっか。初めて会ったときからあった違和感はこういうことだったんだよ。」

何を言ってるんだろう？

納得したように話す自分がよく分からない。自分でも今何を口走っているのか分からないのに言葉は溢れる。まるで自分ではない誰かが話しているような、そんな感覚。

「その微笑の奥にある本当の瞳で見つめているのは誰？この男の子をどうしてそんな怖い目で見ているの？何で崇めても敬ってもいな

いのにそういうフリをするの？」

決して叫んだわけじゃない。

それなのにこの広すぎる空間に私の声は不思議とよく響いた。何も
ない空間に音がすつと溶け込んでいくような、今まで体験したこと
のない不思議な感じ。

この場が無音に包まれる。

それは一瞬心地よい雰囲気にこの場を仕立て上げたが、私の目の前
にいる青年によって壊されることになる。彼は驚いた表情を歪ませ
て困ったような笑みを浮かべる。それから凍えるような冷たい瞳を
こちらに向けてきたのだった。

「ーッ！！」

背筋が凍るような視線。貼り付けた表情から覗く、彼の本気の意が
宿った目。

その目に睨まれていると理解した途端、体が本当に凍ってしまった
かのように動かなくなってしまう。指一本動かせない、なんて比喻
表現があつたような気がするが正に今がその通りだった。小説やゲ
ームのように首筋に剣を突きつけられたわけでも、命の危機に晒さ
れているわけでもないのに動くことが叶わない。

「お嬢さん、私には娘が一人居ましたと言いましたね？それは今か
ら数年前までのこと、もう既に過去の出来事なのです。」
「・・・？」

すると急に何を思ったのか青年はぼそつと呟くように言葉を紡ぎ始
める。

この話はたしか私が今着ている服をもらったときに聞いた話だろう。

この服の以前の持ち主、つまり彼の娘さんのことだ。それが過去のこと、とは一体どういうことなのか。

私はてつきりもう娘さんは独り立ちして家を出ていったのかと思っていたが、どうやらこの話からするとそれは大分見間違いだったようだ。

多分もう、彼の娘さんは、

「私の娘は今から2年前に亡くなってしまったのです。」

多分、訂正確信する。娘さんはもうこの世にいないのだ。過去の出来事とはそういうこと。

でもそれがこの宗教と、この男の子と何の関係があるというのだろうか。

「・・・もしかしたら娘にもう一度会えるかもしれない。」

「え？」

―ボタンッ

「大変です!!」

青年が何かを呟いたが、扉が誰かに乱暴にあかれた音に掻き消されて聞くことが出来なかった。青年も誰から扉に手をかけた瞬間にあの冷たい瞳を引っ込めて元の落ち着いた物腰の良さそうな雰囲気に戻す。なんて変わり身の早い。

「何事ですか？教祖様とお客様に大変失礼ですよ!」

青年の気が扉から転がるように入ってきた男性に向いた途端、今ま

でハードワックスで固めたようにガチガチに固まっていた体から力がフツと抜ける。彼に視線を逸らされたことで緊張がなくなったのだろう。

「あ、リュノ・・・。」

「アキツ、大丈夫か？」

力が抜けてふにやりと蒟蒻の如し体の柔らかさをお披露目した直後に後ろに誰かの温かい体温を感じる。言わずもがな、リュノワールが倒れそうになった私の体を抱きかかえるように支えてくれたのだ。

「うん、大丈夫だよ。ありがとう！」

リュノワールは優しい瞳で私を見つめてくれる。先ほどの青年とは全く反対の、温かい瞳。そんな瞳に見つめられて、先ほどまで感じていた恐怖は何処かへ吹き飛んでいってしまう。

リュノワールも普段は無表情だけど、決して青年のような冷たい顔を奥に秘めているわけじゃない。あれは多分、彼なりの照れ隠しなのではないかと私は思っている。だって、リュノワールは一見無愛想に見えても、本当はすごく優しく、温かい人なのだから。

落ち着いた私は青年に何かを耳打ちしている男性に目を向けた。見た感じだと大体40、50歳くらいじゃないだろうか。服は全身真っ黒でも髪の毛や瞳は当然ながら黒ではない。黒い服を着ているこの人もれっきとしたこの宗教団体の一員なのだろう。

それにしても一体何をそんなに慌てているのだろう。本人は小声で話している気になっているようだが、思いつきり普通の大きさの声になっている。といっても全部会話が聞こえるわけでもない。今聞こえてきたのは“きし”とか“かいめつ”とかそんな言葉。“かいめつ”という言葉が私の知っている“壊滅”の意味だったら非常に

悪い雰囲気であることには違いない。もしかしたら精霊のリュノワールだったらあの会話が聞こえているかもしれない。私はそう思っ
て声をかけようとした

「ねえリュ「こんにちはっ！！」

―バキヤッ

―のを今度は扉が吹っ飛ぶ音に見事に掻き消される。

ものすごい風圧で髪があちこちに煽られてすごいことになっている
のを気にしている暇などなく、その扉の向こう側に居る二人の人影
を視界に入れることで頭がいっぱいだった。

「騎士団でえす！！此処、壊滅させに来たよ」

再び無音に陥ったこの空間に響くのは、この場にそぐわない気の抜
けるような陽気な子供の声。そして姿を現したのは一人の青年と一
人の少年だった。

第8話 終わり

第8話 その濁色の瞳で何を見る？（後書き）

感想等待着ってます！

第9話 青色の瞳は無垢の輝き（前書き）

お久しぶりですm（――）m

今回も鬼の居ぬ間になんとやら状態です（泣
なんとか今を精一杯生き抜いております・・・。

第9話更新です。

第9話 青色の瞳は無垢の輝き

「うわああ！リックくんすごーいつ。ドアがなくなっちゃった」

「って今やったのお前だろうがッ！」

「えゝそうだっけ？唯触っただけなのに。もう、リックのい・じ・わ・るっ。」

「・・・お前、いい加減にしないとその減らず口、麻酔なしで針で縫うぞ？」

「ごめんなさーい！許してリックん！！」

「あとその呼び方もヤメロ」

「ええゝやだあゝ！だってリックくんはリックんだもんっ。」

「・・・もん、て・・・。あゝもういいっ！お前と居るとなんか狂う・・・だから嫌なんだ・・・お前と一緒に行動すんのは。」

「ブーブツ。さっきからお前お前ってボクにはランって名前があるんだからねゝ！」

「はいはい。こんな陰気臭いところ、早く終わらせて出るぞ。」

「りょーかい」

少年と青年は、まるで此処に彼らしかないような世界を繰り広げていた。弾丸のように飛び交う言葉は何処か噛み合っていないような気がするのは私だけなのだろうか。

会話のリズムをずらしていることに気がついているのか疑わしいその少年は、その背丈を越える大振りの斧を片手で軽々と持ち上げている。扉を唯触っただけでぶっ壊してしまうほどの怪力の持ち主なら大斧を軽々と持っているのにも頷けるといふものだろう。フランス人形を髣髴とさせるふわふわな金髪に青い瞳の持ち主で、錯覚なのかどうなのか、私には彼の周りにピンク色の花がほわほわと咲いているように見えた。

それに比べて青年は少年と背丈が大分離れている。目測だが多分20cmくらい青年の方が大きい。細身でスラッとしていて、癖なのか所々跳ねているこげ茶色の髪にライトブルーの涼しげな瞳は気まぐれな野良猫を連想させる。武器は双剣のようで、腰に凝ったデザインの長剣が2本仲睦まじくぶら下がっている。

そして一番特徴的だったのが、二人とも同じデザインの真っ白な鎧を身に着けていることだった。例えるならよく童話とかに出てくるお姫様を守護する聖騎士、がしっくりくる。少年の場合は片手で持っている大斧があまりに禍々しくて、本当に聖騎士なの？というちぐはぐな雰囲気を持ち合わせているが、青年はどこからどう見ても完璧に聖騎士に見える。

「・・・もう来ましたか。流石はベルセーク騎士団。情報が早いですね。」

ぽーっと扉を破壊した二人組みを眺めていると、先ほど男性と話していた青年が舌打ちをしそうな表情で恨めしそうに彼らに目を遣った。先ほどまでも作った表情は何処に行ってしまったのやら、嫌悪感たつぷりの表情を微塵も隠そうとしない。

どうやら先ほど私が気づいて指摘してしまったことで吹っ切れてしまったらしい。ついさっきまで物腰良さ気な笑みを浮かべていた青年が表情を全く隠そうともせず、に相手を睨み付けている光景は結構シユールだ。この青年の変わりようが私の所為だと思つとなんだか微妙な気持ちになる。

「えへへっ」でしょ？ボク頑張ったんだあ。あ、リックくんも頑張ったよね？」

それに対して少年は顔の周りに花を浮かばせながら、青年の睨みになんとも思っていないかのように、いや、多分睨まれていることす

ら気がついていないのだろう。明らかに場違いな笑い声を響かせてその場で片足を軸にしてクルンと一回転した。

「お前その口閉じてろ。邪魔っ。おまけにうざい。もういっちょ言えは俺の前から消えてくれると大いに俺の為になる。精神的にも肉体的にも。」

言外に「だから黙れ。ってか消えろ。」と言っているらしい。いや、言外じゃなかった。今確かにこの後にボソッと、だけどこっちにまで聞こえるような音量で呟いてた。呟いているはずなのに、結構距離が離れている私にまできちんと一字一句聞こえるって微妙にすごい技術を持つてると思う。

「ガーンッ！リッくんひどっ！別にこのお兄さんとお話したっていいじゃん。」

「敵と楽しそうに談笑する馬鹿が何処にいる！？」

「此処にいまっすっ。」

「黙れ。」

「うい。いえっさー。」

青年の一言に何か危ないものを感じたのか、少年はすぐさま頷いた。でも心面白くなさそうに口を尖らせている。それからぷうっとな頬を膨らませて顔を背ける。

―パチッ

（あ。）

ちょうど少年が顔を背けた直線上に私がいた。そして私も少年（と青年）のことをぼーっと見ていた。その偶然の動作が重なってその

無垢な光を宿すまん丸な瞳とぼつちりと目が合ったのだ。目が合つて初めて気がついたのだが、少年の青い瞳は海が太陽の光を反射してきらきら輝いているように好奇心で溢れている。台座に座っている少年には縁遠い、本当に綺麗な目をしていた。今その瞳は驚きに見開かれている。どうやら私を見て驚いているらしいが、一体何処に私を見て驚く要素があるのか。

（もしかしたら黒髪黒目が珍しくて驚いてるのかな？この世界では双黒は珍しいんだったよね。・・・ってあれ？なんかこっちに近づいてくる・・・？）

さっきは驚いているかと思えば、今度は何故かぱあっと顔を輝かせてばたばたとこちらに走り寄ってくる。肩にはどでかい斧が我が物顔で陣取っているので歩くときにその重さに振り回されるのではないかと思っていたのだが、全くそんなことはない。重さの枷がまるでないように普通に走ってくるその姿は、斧を視界に入れなければ子犬が尻尾を勢いよく振りながら駆け寄ってくる姿にそっくりだ。実は私、こういう可愛いものに目がない。今は帰ることのできない地球にある私の部屋はぬいぐるみや抱き枕で約3分の1占領されている。そのほとんどが春ちゃんにもらったものである。春ちゃんは私が可愛いもの好きだと知っているの、誕生日以外にも月に三回の割合で何処からか新作ゆるかわ系、もしくはブサカワ系ぬいぐるみを調達、そして態々郵便輸送してくるのだ。いつからこの習慣がついてしまったのだろうか、今ではそれが当たり前すぎてあまり気にしていなかったのだが、今現在よく考えてみると「何故郵便輸送なんだろう？」と疑問に思わずにはいられない。とまあ話は大分ずれてしまったものの、何が言いたかったかというと、私は可愛いものが大好きだ、ということのみである。可愛いものを視界に入れると意識せずとも頬が緩んでしまうのだ。今もその例外に漏れることなくそういう状況になっている。

（かわいい・・・？本当に子犬みたい！）

「うわゝこの子かわいいゝっ！女の子？男の子？ね、君名前何て言うの？」

「あつ、^{アキ}昼だよ。^{ホミチ}葉通 ^{アキ}昼。貴方は？」

「ボクはラン！ランって呼んでね ねーねー、同い年っぽいしアキって呼んでも、いい？」

同じくらいのはずなのに、何故か少年は下から私を見上げるようにクリンとした丸い目を向けてくる。この仕草を普通の人がやれば何処のホストですか？というかんじだが、この少年、ランに限ってこの仕草は可愛さを増幅させるものでしかない。それはもう子犬みたいでかわいかった。これを見て頷かずにはいられない。

「うん、いいよ！」

「わーい！ありがとうアキッ！」

「ひゃっ／＼／＼／＼」

子犬が親にじゃれて飛びつくように、ランは私に急接近してきてその細い腕を腰に回す。言い回し方が難しかったかもしれない。簡単に言ってしまうえば、私はランに抱きつかれている。しかもかなりお互いの体が密着するような深いハグだ。

友達とすらこういうことはしたことがないので、こういうときにどんな反応していいのか分からず、頭を混乱していく一方で何も考え付かない。親に抱っこされていたのは随分過去の話であって、よく覚えていない。歳が上がるにつれてそういうことに抵抗感を覚えていった私にはこういうスキンシップに対する免疫力も、対処の仕方も分からないのだ。恐らく私の顔は過去類を見ないくらい真っ赤になっっていることだろう。そんな私には無意識に震えてしまう声で、

ランに話しかけることしか出来ない。

「えっと／＼／＼・・・ラン？」

「うん？なあに？」

（え！？なあにつて・・・何つて・・・いや可愛いけど、すごく可愛いんだけど・・・本当に何言えいいのか分からないよー！！）

別に私はこういう風に人にべたべたされるのが嫌いなわけじゃない。むしろ頼ってくれたほうが嬉しいし、友達ってかんじで好きだ。だけどそれにも限度というものがあって、ハグという選択肢は頭の中に入っていないかったのだ。

縋る思いでこの少年の暴走？を唯一止められるのだろう存在である青年に困った視線を向けてみるものの、0.1秒で首を横に振られて肩を竦められた。そして「あきらめてくれ」と、憐れみの目を向けられる。いや、もしかしたら青年は特にそんなことは思っていないかったのかもしれない。偶々首を横に振って、偶々青年と目が合っただけなのかもしれない。けれど私の目に青年はそんな風に映っていた。

何も思いつかない私はいつの間にか、いずれ離してくれるよね、と樂觀的に考え始めていたのだが、その思考は中断させられる。急にランの腕から体が上にすっぽ抜かれ、ふわっと宙に浮く。

「あ。」

私とラン、どちらともつかない啞然とした声がその場に響く。そして次の瞬間、もう既に私はリュノワールの腕の中に居た。今回はお姫様抱っこではなく、普通の抱っここのようだ。リュノワールの腕の中だと理解した時からストンと混乱していた頭が落ち着きを取り戻し、硬直していた体の緊張が解れた。

見上げたところにある彼の顔は驚くほどに無表情で、今ばかりは何を考えているか分からない。何故急に抱っこしたのだろう？突然そういう気分になった、とか？うん・・・謎だ。

「むう・・・。お兄さん、独り占めはよくないよ。」

「気安く（アキに）触れるな。」

何が気に入らなかったのか、ランは再び口を尖らせる。それに対するリユノワールもその無表情をランに向けて剣呑な言葉を放つ。

（リユノワールは人にべたべたされるの、好きじゃないんだ。触るなって、そういうこと、だよな・・・？あれ？じゃあもしかしてリユノワールは私がこうしてくっついてるの、迷惑に思ってる、のかな・・・。）

もしそうだったら、リユノワールは相当我慢していることになる。此処に来るまでの間、何回こうして抱っこしてもらったか覚えていない（この場合暗記力がどうのこうの、の話ではなく全く言葉通りの意味である）。その度に彼はものすごい迷惑だったんじゃないのか。

（本当はあまり人とくっついていたくないのに、私の歩くスピードがリユノワールにとっては鈍間すぎて、しょうがなくそうして行くしかなかった、から。だから今まで我慢して此処まで来たのだとしたら？・・・もしかして、私ってものすごくリユノワールに迷惑かけてるんじゃない・・・。うん、というかほとんど私、お荷物状態じゃ・・・。）

彼は優しい。だから私を見捨てることが出来なかった。これだけで今までの行動全てに説明がつく。

(・・・って・・・あれ？なんかすんなり辻褃合っちゃったよ？・・・えっと・・・)

「・・・アキ？」

「あ、えつとね、リユノ。あの「ラン！」」

なんだろうこのデジャヴ。二度あることは三度ある、とはよく言っただものだ。

私の決死の言葉をタイミングよく台無しにしてくれたのは今の今まで黙ってこちらを見て(観察して)いた、ランと一緒にこの場へ入ってきた青年だった。先ほどの余裕ある表情とは程遠い、なにやら険しい顔をしてランに向かって鋭く通る声で叫んだのだ。

「分かてるよっ！ちよつとそこのお二人！逃げようとしたって無駄なんだからね！」

その言葉とほぼ同時にランがものすごい勢いで、此処から脱出しようとしている青年と男性の元へ向かう。しかし青年と男性が向かっている方向はまるで扉と反対方向、つまり台座に座っている少年の方であった。

これほど騒いでいるのにやはり顔をひとつも動かさない少年は、彼らが自分の方向に向かってしていることにすら興味を示さない。誰が見ても鬼気迫る状況であるはずなのに、その少年の周りだけは切り取られた空間みたいに平穏だ。その少年を眺めているとなんだかこちらまで蚊帳の外にいないか、と思ってしまうくらいに。

ランが追いつく前に台座にたどり着いた青年は、そこに座っている少年に何かを耳打ちする。すると今まで全く反応しなかった少年の形の良い眉が微かにだがピクツと動く。

「拙い！！ラン、引け！！」

「え、うわっ！？」

青年が叫んだ瞬間、何かが弾けた。

少年を中心に爆風が荒れ吹き、ランは斧を地に突き刺しその小さな体が飛ばされないように踏ん張っていた。その際ランの両足がついていた地面が小型クレーターみたいに凹んでいたのは出来れば見なかったことにしたい。もしかして斧を地面に突き刺さなくてもその場に残っていられたんじゃないかとも思わない。もうランが怪力持ちなのは此処にいる全員が知っていることなのだから。

リユノワールに抱きかかえられるようにして庇われ吹き飛ばされるという難を逃れた私は、その中心の人物を視界に収めようとした。でも台座に虚ろな少年は居なかった。何処にも見当たらない。爆風に飛ばされたのか耳打ちしていた青年も男もその場にいなかった。

「！！！？・・・え・・・？何、あれ・・・」

其処には代わりに違う生き物が居た。

「・・・堕ちた聖獣のなれの果て。」

「え？」

ぽつりと呟く声。

リユノワールはそう言って、其処に居る生き物に哀れみのこもった目を向ける。私とリユノワールが見ているものは勿論同じ、其処にいる生き物。

「くそっ・・・間に合わなかったか・・・。」

地に刺さっている剣を抜きながら青年も舌打ちする。でもその表情はリユノワールのように悲しげなものではなく、面倒臭そうな雰囲気気が漂っていた。その反応に疑問を覚える。

この二人の反応の相違で、私はこの状況をどのように判断しているのか分からなくなる。少なくとも今の状況はリユノワールにとっては悲しむべき事態で、この青年にとって非常には面倒臭い状況に陥っているらしい。

でも私にも分かることはある。この状況が極めて異質であるということ。

「・・・ああーあ。間に合わなかったね。・・・本当に、これはいいよヤバくなってきたなあー ね、リックくん。」

そして此処に居る全員にとって非常によろしくない状況であるということ。

ーグルルルルルルルルルル

低い唸り声が空気を震動させる。

距離が離れている此処でさえ肌にびりびりと空気の揺れを感じた。その原因である生き物は漆黒の毛に体中を覆われていて、耳元まで裂けた口からはそれに映える真っ白な牙がその存在を主張するように光っている。その生き物の形はなんといっているのか、知っている言葉で表せば、犬とも狼ともつかない形をしている、だ。というのも背中にも悪魔のような禍々しい翼が生えているのだ。

少なくとも私は背中に翼の生えた犬を見たことは生まれてこの方一度もない。となるとこの生き物は“魔物”ということになるのだろうか。よく見れば以前襲い掛かってきたあの毒々しい色をした狼の形の魔物の形に似ていないこともない。

しかし決定的にこの生き物と紫色の魔物と違うところがあった。以前遭った魔物の目はぎらぎらと飢えた獣のような光を宿していたのだが、今日の前に居る“魔物（？）”の目は空虚・・・虚ろであった。光がない、という言葉がしっくりくる。

低い唸り声を上げて私たちを威嚇しているのにそのピリピリとした雰囲気も全くない。まるで形を持った威圧そのものが其処に存在している。そんなかんじがした。

「・・・も・・・とは・・・し・・・くな・・・ッ！・・・い・・・だ・・・」

「・・・さて、じゃあボク達の仕事、始めよっか」

終わり

第10話 聖と魔混ざりて黒橡色となる（前書き）

お気に入り件数が思った以上に増えていて驚きました@@
この調子で頑張っていきたいと思います！

第10話更新です。

第10話 聖と魔混ざりて黒橡色となる

「お前、仕事内容きちんと覚えてんのか？」

「今のは流石のボクでも怒っちゃうよー！！すつごく簡単だったからちゃんと覚えてるもん！ボクの仕事は斧を振り回すこと！」

「お前の頭は一年中お花畑か！？」

「だとすればリックくんは雪山だね。四六時中頭の中吹雪いてる」黙れこの大馬鹿ド阿呆が」

今一瞬、青年の言葉ともにブリザードが吹き荒んだような……。いや、気のせいではない。絶対今ブリザードがこの場を通り過ぎた。その証拠に、それを直に浴びたランは顔を真っ青にして体を震わせているのだから。

花畑に急に雪が降ってきたら、花にとっては一溜まりもないことだろう。きつと抗うことも出来ずなす術もなく、あっという間に茎の芯まで凍り付いてしまうのだ。今のランのように。

（ん？ってことは……。つまり、あのリックんって呼ばれてる男の子>ランってことになるのかな？）

概ねそういうことになる。

細かく訂正するとすればイコールが入って青年　ランになるのだが。青年がランを口で黙らせることが出来るように、いざとなったらランも力で青年を黙らせることが出来る。二人が微妙に間を保ってられるのは二人の（ある意味での）パワーバランスが絶妙な均衡を保ち続けているから。ただやはり雪と花では雪のほうが強いらしく、青年　ランとなっているようだ。といっても、本人たちにとってはどうでもいいことにすぎず、青年　ランだろうが、青年<ランであ

ろうがどちらでも構わないのだ。

「だって、そう言っただよ！フィガロが“あ？お前の仕事だあ？そんなの肉体労働に決まってるだろうが！筋肉の友よ！ガハハハハハ！”って。あ、一応断っておくけどボクは筋肉友の会には所属してないからね。」

ものすごく失礼なことだとは思うのだが、フィガロという人がどんな人なのか、ランの物まねを見ていたら大体想像がついてしまう。背中を反り大口を開けながらガハハハハと笑う人は大抵、というかほぼ高確率で筋肉ダルマなのだ。それに何しろ“筋肉友の会”に所属しているくらいなのだから、筋肉をこよなく愛している人で恐らく間違いない。

因みに“筋肉友の会”って何？なんて野暮な質問は勿論しない。この名前だけでも十分に活動内容が伺えるというものだろう。とにかく『筋肉の筋肉による筋肉のための』会なのだ。考えるだけ時間の無駄だ。

「またあの脳筋野郎か！というか脳筋^{フィガロ}に聞く時点で間違ってるんだといつも言っているだろうが！あいつの脳みそはその名の通り筋肉でくまなく支配されているんだ。筋肉にまともな答えを期待するなこの馬鹿チビ。任務の内容はセベリアに聞け！」

「セベリア居なかったん「何か言ったか？」さーて、仕事仕事と」

どうやら言い訳も言わせてもらえないらしい。同情して涙ぐんでしまった私は悪くない。

世知辛い世の中になったなあ、とランがぼやきながら斧を片手に持ち替えて、目の前に居る獣に容赦なく切っ先を向ける。

その向けられた本人、獣はというと薄く開く口からは未だに唸り声が漏れているものの、やはり少しの闘気を感じられない。まるで体と精神が別々に動いているような・・・気味悪く感じるこの矛盾は一体何なんなのだろう。

「お前なあッ！・・・もういい。今回は忌色崇拜の異教徒たちの壊滅、及び堕ちた聖獣の始末。因みに“壊滅”の意味は分かるよな阿呆ナス。」

壊滅―やぶれほろびること。こわれてなくなること。（By 広辞苑）

言葉の意味というものは余程難しいもの（例えば軋轢あつれきとか演繹えんえきのよくな熟語）でなければ、大体その使われている漢字の雰囲気でその熟語の意味を察することが出来るのではないだろうか。ただその熟語を言葉で説明しろと言われると一気に難易度が上がってしまうのだが、自分で意味を解釈する分には雰囲気で捉えるのも悪くはないと私は思う。それでももし手元に辞書があるのならば索引して、意味をしっかりと覚えることをお勧めする。その方が後々自分の為になる。雰囲気で捉えるやり方は、間違った解釈をしたまま、間違った意味で覚えてしまうことが多々あるのだ。（勿論私も意味を間違っ

て覚えてしまったうちの一人である。）とまあ、結局のところ辞書で索引するのが一番手頃で間違えない方法なのである。そしてランの説明を聞くに、どうやら彼も言葉の雰囲気で熟語を捉える方のようだ。

「むう・・・壊して滅ばせばいいんでしょつ。壊すのはボクの専売特許だよ？知ってるでしょ？」

「はいはい。じゃあ確認はこれで済んだな？やるぞ。」
「うん」

ランの明るい返事は、目の前にいる生き物の巨体に音が吸い込まれていくように霧散する。

そしてそれが合図だったのか、ランはガラツと身に纏う雰囲気を変えた。表面上は普段どおりに笑みを浮かべているように見えるが、眼つきは刃の切っ先みたく鋭く、全くの別人に見える。例えば花畑が一気に荒野になり、先ほどまで舞っていた綺麗な花びらは雨風と変わってビュビュウ吹き荒れているような、そんな感じた。ひどく場慣れしている。

なんてことを思っていると、ふと思い出す。

彼らはいくつもの戦場を駆け抜ける騎士団の一員なのだ。実際この世界の騎士団がどういう活動をしているのか分かるわけもないのだが、私が持っている知識の中の騎士は、国に仕え国を守り、王に忠義を尽くす剣技に優れた先鋭たちの集団、とある。幾重にもこういう場面に遭遇してきたのである。彼らが場慣れしていないはずがないのだ。

「俺が聖獣の気を惹く。後はいつも通りな。」

「りょーかい！」

私が考え事をしているうちに言葉少なに視線を交わした二人は、同時にその場から動き始める。

私はそれを視界の端に映しながら、先ほど青年が言っていたことを頭の中で反芻させていた。たしか、今回の任務はこの宗教団体を壊滅させること。それからおちたせいじゅうのしまつ、と言っていた。一つ目の内容は理解できたが、二つ目の内容“おちたせいじゅうのしまつ”を漢字に変換出来ず、聞いていても全く意味が分からなかったのである。

先ず文章の最初に来る“おちた”が分からない。普通に考えると“落ちた”になるのだが、その意味に変換しても何も見えてこない。

（多分今の状況を見るに、“せいじゅう”というのはあの黒い犬みたいな魔物のこと。・・・そうすると、あの二人は魔物を倒すのが二つ目の内容、ってことなの・・・かな？でも“おちた”って一体どういう意味なんだろう？）

「あれは魔物じゃない。」

「え？」

ぼそつと呟く声が耳元に当たる。どうやら私が心の中で思っていたことが聞こえてしまったようだ。

「えっと、あれは魔物じゃないの？」

「・・・ああ。あれは聖獣だったものの、だ。」

リユノワールの言葉に違和感を覚える。それが伝わったのか、彼は悲しそうな瞳を“せいじゅう”という生き物に向けながら口を開いた。

「・・・聖獣とは本来、光属性を持つ神の使い魔としてこの現世に降り立った聖なる獣を指すことは知っているな？」

「う、うん？」

「・・・もしかして知らなかったのか？」

「・・・うん。えっと、続けてくれる？」

「あ、ああ。」

今リユノワールが変な表情をしていた原因は私だろう。前にも一回か二回ぐらい見たことある、なんともいえない顔。とりあえず今はそのことに突っかかるべき時ではないのを分かっているので、悲しい気持ち芽生えたとしても敢えて何も言わない。

私が我慢していることに気がついて気を利かせてくれたのか、リユ

ノワールはまた視線を“せいじゅう”・・・訂正聖獣に戻す。

「・・・聖獣の性格は温厚で、人間が住んでいる地には下りてこなはずなんだが、時々迷って下りてくるやつが居る。そういう聖獣を人間が見て、町や村を襲いに來た魔物と勘違いし、討伐しようする。その聖獣が人間や町に襲いかかったわけでもないのに、だ。・・・そんなことをされたらいくら温厚な聖獣とはいえ怒り狂うに決まっている。まあ神の御使いだとは言っても所詮は獣だ。その一時の激情に任せて人間を襲って殺してしまうことがある。その結果、・・・聖獣は堕ちる。」

「一体何処に落ちるの・・・？」

「・・・さあな。深く暗い闇の底か、はたまたこの世の地獄であると称されるインフェルノか・・・俺には分からない。・・・とにかく聖獣がそして堕ちた成れの果てがあれだ。」

リユノワールの視線を追って目に映ったのは、ランと青年が対峙している、黒い毛に包まれた犬のような形の生き物。

そして聖獣からその周りで武器を手に戦っている二人に移る。今現在、青年が聖獣に向かって正面から剣を振り下ろしている。そしてランは背後からあの大きな斧を振りかぶって聖獣の背に攻撃しようとしているところのようだ。

二人の刃が届く寸前に、聖獣は動き出す。

正面から来ている青年に向かって鋭い前足にある爪を振るい、背後のランには長い尻尾を大いに駆使して攻撃を防ぐ。危ないっ！と思っただけで内心冷や冷やして見ていたがその心配は杞憂だったようで、二人はそれを軽々と避けると空中で一回転してから地面にスタツと着地した。まるで大道芸人のような身のこなしだ。あの二人なら涼しい顔して綱渡りとか空中ブランコを出来そうな気がしてくる。

「ちっ、やっぱりガードが固い・・・？おかしいな。たしか百年前に

一度現れた聖獣は誰であれ無差別に攻撃してきて、ほとんど防御態勢をとるなんてことはなかった、と書いてあったはずなんだが。」

爪を剣で弾いてその反動で地面に着地した青年は、その攻撃を受けたほうの片手をぶらぶらさせて訝しげな表情を浮かべる。

「そうだね。なんかこっちが攻撃しないと攻撃してこないし・・・。」

「・・・とりあえず今はこの固いガードを突破するぞ。」
「うん」

再び二人は聖獣に向かっていく。

（・・・あれ？つてことは、おちたせいじゅうのしまつ、というのは堕ちた聖獣の始末・・・つてこと？・・・あの聖獣は悪くないのに・・・始末、つまり殺しちゃうつてこと・・・？それは、何かおかしいんじゃない・・・）

「ねえリユノ。あの、堕ちた聖獣つて元に、正気に戻すことつて出来ないのかな？」

あの聖獣が元に戻れば、始末されることはなくなる。リユノワールの話から考えてみれば“堕ちた”から討伐されるのであって、普段の状態の聖獣だったら殺される必要は皆無なのだ。そしたらあの二人が危険な目に態々遭うこともないし、聖獣も命を奪われるがことがなくなる。

しかし、リユノワールの首が縦に振られることはなかった。

「・・・前例がない。今まで、俺が生きてる中で堕ちた聖獣が元に戻った、というのは一度も聞いたことがない。」

それに、と続ける。

「聖獣が下りてくると自体滅多にない。俺がこれより前に見たのは今から100年くらい前の話だ。」

「100年!？」

一体リユノワールは何歳なのだろうか。ふと疑問に思ったのは今は置いておくとしてだ。

それにしても前例がない、と彼は言う。ということは元に戻す手立てが全く分らない状態を意味する。つまりはだ。リユノワールは、聖獣を元に戻すことは出来ないと言外に言っているのだ。

「・・・そんな顔するな。アキが悪いわけじゃないんだ。・・・これは聖獣あいつの運命さだめ、最初から決められてたこと。神でさえ、それを變えることは出来ない。・・・だから」

リユノワールが屈んで顔を覗き込む。漆黒の艶やかな髪がさらつと肩から零れ落ちる。

それから困ったように眉を顰めて、彼の左手は私の頬を優しく撫でた。

「・・・だからお前がそんな顔をしなくても、いいんだ。そんな、・・・泣きそうな顔するな。」

頷くことは出来なかった。

リユノワールが私よりも、悲しそうな顔をしているから。涙は流していないけど、泣いているような気がしたから。リユノワールも、もしかしたら私と同じで聖獣を元に戻してあげたいのかもしれない。

―ガキンッ

「ランッ!」

誰かが地面に叩きつけられた音がしたかと思うと、青年の焦った叫び声が響き渡る。

反射的に音のした方へ顔を向ける。そこには突っ伏して動かないランと、少し離れて地面に突き刺さっている大斧があった。ランが倒れている所にクレーターが出来ているのを見るに、余程強く叩きつけられてしまったらしい。

一時青年はランが弾き飛ばされたことで集中を切らしてしまったものの流石騎士と言うべきか、一瞬で意識を切り替えて聖獣から一旦離れて体勢を立て直す。

「おい!! その二人! 早く此处から脱出しろ!!」

視線を聖獣に向けたまま彼は叫ぶ。どうやらランと青年は私たちを気にして戦ってくれていたようだ。それは国民を守る義務のある騎士だからか、それともなけなしの彼の気遣いか。どちらにしろありがたいことではある。しかし今此处から出て行く気にはどうしてもなれない。ランと青年が気になるし、聖獣のこともさっさと諦めて逃げる、なんてことはしたくない。

「……聖獣は、あなたは悪くないっ。」

「……アキ……?」

「……ねが……す・て……ッ!! もう……こ・した……
・!!」

「聖獣は・・・、あなたはまだ元に戻る。」

さっき、誰かが叫んでいる声が聞こえた気がした。そしてそれは気のせいなんかじゃなくて今もまた聞こえた。臃だけど直感で分かる。きつと、この声の主は聖獣。

まだ戻る。

絶対に、と言える確信があるわけじゃない。だけど、何故かそう思えるのだ。予想でも予感でもない、何かがそう思わせる。

「アキ!？」

「おい!何をやってる!？」

二人の声が重なる。

そう、私の足は自然に聖獣へと動き出していた。自分でも気がつかないうちに動いていて、二人が上げた叫び声で気がついた。

今、自分が聖獣目掛けて走っているということに。

―もう、近づいてこないで・・・。これ以上、僕は・・・人を殺したくないよう・・・

「・・・うん。」

―もう、もうやだよ・・・僕は、僕は人殺しにはなりたくないよ・・・!!!

「・・・もう、大丈夫っ!大丈夫だよ!ほら、ね」

正面から聖獣の顔に抱きつく。彼の鼻がお腹に当たって少し息苦しいけど、ふさふさの黒い毛並みは驚くほどに柔らかくて気持ちいい。

そしてその毛並みはとてもじゃないけど人殺しには到底思えない、
日の光の温かいにおいがした。

終わり

第10話

第10話 聖と魔混ざりて黒橡色となる（後書き）

感想待っています！

第11話 ハゲ+? Ⅱ 金色（前書き）

時が経つのは早いですね。もう半年終わってしまいました；；
あと約半年で受験が・・・センターが・・・orz（ガクガクブルブル

あ、第11話更新です。

第11話 ハゲ+? Ⅱ 金色

体中の感覚を通して伝わってくる聖獣の温かさは紛れもない彼自身の温かさ。

顔が余裕で埋まるくらい長い黒毛は見た目ごわごわしている・・・かと思いきや全くその正反対、ふわふわのさらさらだった。思わず目を閉じてうつとりと時を忘れてしまふところだったのは、私の心の中に仕舞っておくとする。

腹部に当たっているひんやりと湿った鼻の頭からはじんわりと冷たさを感じる。その冷たさはまるで聖獣の心が冷え切ってしまったかのような錯覚に陥らせる。いや、錯覚などではない。正に今、彼の心は冷え切っている。時折頭の中に響いてくる彼の声音は苦しみの色だけではなかった。そう、何処か寂しそうだった。

近づかないで。殺してしまうから。

だけど本当は近づいて欲しい。寂しいから。

でも近づかないで。やっぱり殺してしまうから。

怖いから前を見ることが出来ない。

でも前を見ないと誰かにぶつかってしまうかもしれないし、池に落っこちてしまふかもしれない。顔を上げればそこにはもう世界が広がっているのに見ようとしなない。

今のままがいい。今のままでいい。

ずっとこのまま。

（・・・それが貴方にとっての平行線。分かるよ。其処から出なければずっと平和が続くから。だから安全で安心。この状態が一番楽・・・でもこのままじゃずっと其処に、暗いところに閉じ込められたままなんだよ？）

前を見ないことが悪いことだとは言わない。

だって私も前を見ていないうちの一人だと自覚してるから。でも前を見ないと何処にも行けないことを知ってる。顔を上げないでいると、いつの間にか気がつかないうちに自分の立っている場所が何処か分からなくなるんだ。

「此処は何処？・・・あれ？私って、一体今何処に立っているんだろう？」

そう呟いて周りを見回してから自分の立ち位置を把握するのでは遅い。

自分の周りを黒で固められて足元はぐらぐらと不安定。自分が今浮いているのか沈んでいるのか立っているのか座っているのかしゃがんでいるのか全く分からない。もし自分の体を黒で塗りつぶされてしまったらきつとそうなるだろう。周りの黒と同化して何も見えなくなってしまうているのだから。そして当たり前のことに鏡でもなければ自分の顔を見ることも出来ない。

実質上、其処には何も無いことになる。

前を向かなくても見えることは勿論ある。だけど前を見ないと見えないものも当然沢山あるのだ。自分の足元だけを見つめていても足元しか見えないけど、前を向けば視界が開けて色んなものが見えるようになるはずだ。

もし周りが黒塗りになっていたとしても、誰かが教えてあげれば、

道を示してあげれば、その人の世界は少しずつ変わっていけるかもしれない。立ち位置を気づかせてあげればまだ戻れるかもしれない。彼だって。

「ね、聖獣さん。私、殺されてないよ？こんなに近づいているのに。」

返事はない。だけど続ける。

「もしかして貴方は人を一人も殺してないんじゃないかな？だって貴方からはそういうにおいはしない。太陽の、ぽかぽかの温かいにおいがする。」

―びくっ

聖獣が一瞬体を揺らす。毛に埋めていた顔を上げて彼の瞳を見つめると、その無機質な目の中でもゆらゆらと光が揺れているように感じた。

私の声がきちんと彼に届いている証拠。続ける。

「それにさっきからずっと貴方は叫んでいたよね。殺したくないから近づかないでって。それって、まだそういう優しい気持ちがあるってことなんじゃないのかなあって。・・・近づいても殺さないのは、貴方がまだ堕ちてない証拠。」

薄々感じていた違和感は多分これ。

聖獣はまだ堕ちてない。堕ちてるけど、まだ本当の意味で堕ちていない。確実にそう言い切れる（何をより所にして確信したのか自分の中でも疑問だが）自信があった。

冷たい、無機質な壁の向こう側にある彼の残った心。それは諦めと

ほんの一握りの悲しみ。だから彼が威嚇して唸っているのにピリピリとした雰囲気が全く感じられなかったのにも頷ける。本来ならば恐らく、推測でしかないがそういう気持ちが一切消えてしまうのだろう。しかし不思議なことにマイナスな気持ちが残ってしまった彼の場合、それがたとえマイナスだったとしても彼の気持ちが残ったことに変わりはなく、それが“堕ちた聖獣”である自らのブレーキとなった。

その残った気持ちがあるが故に苦しんでいる。だから残らないほうが良かった。

その残った気持ちがあるから一歩手前で止められる。だから残って良かった。

でもそれが彼にとって不幸なのか幸いなのか私には分からない。実際彼はこうして苦しんでいるのだから。でも、もしかしたら彼も希望を見出していたのではないだろうか。諦めの中にあつた悲しみは多分、希望の裏返し。元は希望だったものが時間が経つにつれて悲しみに染まっていつてしまった。

そんなのは、悲しすぎる。つらすぎる。

「・・・もう戻ろう?」

無意識のうちにぎゅっと腕に力がこもる。彼の体が小刻みに震えていたから。もしかしたら泣いているのかもしれない。

そして次の瞬間、

「!？」

一瞬眩しい光が私の目の前を真っ白に染め上げる。眩しくて反射的に目を閉じてしまったが、そのときに微かにリユノワールが私を呼

んでいる声が聞こえたような気がした。

目を瞑ってからどれくらい経ったのだろう。実質そんなに時間は経っていない。せいぜい長くて5分程度だろう。けれど今この場が沈黙に包まれている所為か、私にはとても長い時間経ったように思えた。

（一体、何が起こったんだろう・・・？急に目の前が光って、それから・・・？）

状況把握をしようとして目を開けようとしたとき、ふと全身に温もりを感じた。まるで自分と誰かが密着しているような・・・。たしかに聖獣を抱きしめていたからそれは当たり前のことなのだが、あの気持ちよかったふもふも感がなくなっていることに違和感を覚えずにはいられない。腹部に当たっていたひんやりと湿った鼻もなくなっているようだ。何かがおかしい。

—ぎゅっ

「えっ!？」

そんなことを思っていると誰かの腕が背中にまわされ、優しく抱きしめられる。驚いてつい目を開く。

私の目の前を覆っていたのは誰かの首筋にふんわりとかかっている真っ白な髪の毛だった。此处は光が入ってこないはずなのにその髪

は艶々と輝いていて、所謂天使の輪が綺麗に出来ていた。純白に輝くその髪はきつと絹のようにさらさらなのだろう。そしてその下にある首筋は雪のように真っ白で、まるで生まれてから一度も日に当たっていないような・・・

（つてあれ？こんなこと前にも思ったような・・・。）

私を抱きしめている誰かが肩に押し付けていた顔を上げる。さらっと白い髪が視界を通り過ぎるのに目を奪われていると、いつの間にか目の前には無邪気に笑みを浮かべている少年の顔があった。思わず息を呑む。

髪の色は純白、目の色は黄金と全く違うが、間違いなくこの少年は聖獣が現れる前に台座に座っていた教祖様と呼ばれる少年に相違ない。あのときの無表情は一体何処へ行ってしまったんだと叫びたくなるくらい表情に溢れていて、太陽の光のような黄金の瞳は間違いなく私を見ていた。唯映しているだけではなく、きちんと見ている。

まるつきり別人だ。

開いた口が塞がらない、とはこういう時のことを指すのだろうか。私が呆気にとられているのを見てか、少年は面白そうにニコツと笑う。それから何を思ったのか急に少年の顔が接近してきて、驚く暇もなく視界が真っ暗になった。真っ白になったり真っ黒になったりと忙しい私の目はそろそろ疲労してきているのか、私には彼の黄金の瞳が至極至近距離にあるように見える。もう本当にあと数ミリで睫毛がくっついてしまうのではないか、というくらいに。ふとそのことに疑問を覚える。

（すごい・・・吸い込まれそうに綺麗な瞳・・・。あれ？でも何でこんなに接近されているん・・・！！！？）

「!!!?・・・んんッ!?!」

気がつけば口を何か柔らかいもので塞がれていた。息が出来ない。苦しくてそれから逃れたくても、少年の腕が背中に回っているため後ろに体を引くことが出来ない。大人しくそのままにいるしかなかった。

「むう・・・ープハッ。・・・はあ、はあ・・・いきなり、一体・・・ッ／／／」

数十秒間とかなり長い間そのままの状態が続き、やっと塞がれていたものがなくなり開放される。本当に窒息するかと思った。

そうしてようやく脳に酸素が回り働くようになった頭で、自分が今目の前の少年に何をされていたのか理解した。目の前の少年も息を少し乱しながら頬をほんのり赤くして、潤んだ瞳でこちらを見つめている。勿論私の顔も真っ赤で、脳みそが沸騰してしまうんじゃないかというくらい熱い。軽くオーバーヒートを起こしそうな勢いだ。

(・・・キス、された・・・／／／)

しかもファーストキスだった。正真正銘の、生まれて初めての接吻。それだというのに目の前の少年は悪びれる様子もなく、それどころか何故か嬉しそうに無邪気に笑みを浮かべている。でも、不思議と怒りが湧いてくることはなかった。苦しかったけど、特別嫌なわけでもなかった。

唯、何か腑に落ちないような感情がさらりと手のひらから零れ落ちていった気がした。

「あき。・・・あき、だよな?」

「え？あ、うん。そうだよ。」

ぽつりと呟く少年の言葉に頷くと、ぱあつと顔を今以上に輝かせる。心なしか背中に回されている腕の力が強くなる。それから堰を切ったように私の名前（+愛？）を叫び始めた。

「あきっ！あき、あきっ。あき大好き！！」

「へ？／／／／」

「もう大好き！一番好き！！この世で一番大好き！！好き好き好き！！あきだあいすき！！」

—むぎゅっ

「えっ、えっ！？／／／／」

何だろうこの状況。

あまりに唐突過ぎてよく理解できない。恥ずかしすぎてもう顔とは言わず体中までもが熱い。まるで50度の熱湯風呂に入っているような感覚。熱すぎてどうにかなってしまいそうだ。

自分にここまでこういうことに対する耐性がなかったとは全く知らなかった。未知なる発見だ。とか地味に喜んでいる場合でもなく、その間にも少年の告白はずっと続いている。

「好き！好き好き！！あきっ、あき！好きだよ！大好き！！すごく好き！！」

（えっと・・・これってもしかしてエンドレス・・・？・・・ってこうして聞いているとやっぱり恥ずかしくなってくる／／／／）

「あの、さ」

このままでは永遠に終わらないのではないかと危惧した私は勇気を
出して声をかけてみた。すると驚くほどにぴたっと言葉の羅列が止
まり、きらきらした目でこちらを見つめてくる。どうやら全くこち
らを気にしないで言っていたわけではないらしい。かわいらしく首
を傾げるその姿は少しだけランと似ている。率直に言えば、目茶苦
茶かわいいのである。頬が緩んでしまった私は悪くない。

「あのね、その気持ちはとっても嬉しいけど、そんなに言葉に出し
て言うことじゃないと思うんだ。そういう言葉は本当に大事な人が
出来たときのためにとっておく。その方が言われた人はきっと嬉
しいと思うよ。・・・ね？」

きよとん、と何を言っているのか一瞬理解出来ていなそうな表情を
したが、また再びニコツと笑う。人懐こい子犬みたいな顔をして、
もし尻尾があつたらふりふりと振っているのだろうなあと思いなが
ら少年の顔を見つめる。

なんかもう、ものすごくかわいかった。

と急に誰かに後ろから羽交い絞めにされて少年から無理やり引き剥
がされ、そのまま後ろに引きずられて少年と距離をとる。

「大丈夫か、アキ。」

「あ、リユノ！うん、大丈夫だよ。ありがとう。」

上を向くと見知った銀色の瞳とぶつかる。心なしかいつもより無表
情のような気がした。何だろう・・・？背後から肩に回された腕
はがっちりとしていて梃子でも動きそうにない。少しおかしいなっ
て思う。普段なら恐らくこんなに強くしないのに。気を使ってくれ
ているのか、抱っこしてくれるときもここまできつく腕を回してこ
ない。それにリユノワールはこうやってべたべたするのが好きじゃ

なかったはず。・・・なのに何故？

そして一人取り残された少年は今一体何が起こったのか分からず
ぼけーっとしていた。しかしその数秒後、私を視界に入れた途端に
輝かせてこちらに駆け寄ってくる。

「あきつー!!」

「近づくなガキ。お前、殺す。」

それに対して物騒な言葉を吐きながら足元の影を揺らしているリ
ノワールの言葉に本気の意がうかがえたのは、決して気のせいなん
かではない。何故怒っているのかは置いとくとして、せっかく元に
戻った聖獣を見て殺意が芽生えたというのは何処か変な話だろう。
リノワールだって聖獣に元に戻って欲しかったはずなのに。

（最近リノの行動が色々謎だなあ・・・。）

そんなことを思っていると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。埃
まみれの金髪を片手ではさばさと払いながら上半身を起こす。

「ん・・・うーん・・・なんだろう・・・すごく騒がしいよ・・・。」

「ラン、大丈夫か？」

「うん 超大丈夫！リッくんがボクを心配してくれるなんて、うっ
れしいなあ♪」

「これ以上頭やられても一緒に行動してる俺が困るだけだからな。」

「なんて世知辛い世の中なんだろう。リッくん、頭蓋骨から脳みそ
だして柔軟体操でもやったら？そうすれば少しは来世ではましにな
るかも」

「暗に俺に死ねと・・・？」

「まつさかあゝ！ボクがそんなひどいこと言うはずないじゃん！」
「ああもうお前と話しているとマジで狂う。怪我人の分際で。少し黙
つてろ。」

独特のリズムで話す声。どうやら私たちが騒がしかったためランが目覚めてしまったらしい。あれだけ強く地面に叩きつけられたというのに、見たところ怪我といった怪我はなさそうなのでほっと安心。

で、現状に目を向ける。

「・・・えっと・・・二人とも、離してくれるとすごく助かるん、
だけど・・・なあ・・・」

前からは少年が、後ろからはリユノワールが腕を回していて、とてもじゃないが身動きが取れる状態ではなかった。もうなんだか色々
と慣れてきて、恥ずかしさとかそういうものが色々とその短時間で何処かにぶっ飛んでいった気がする。どうやら適応能力凄まじく
あるらしかった。

第12話 太陽の色だから（前書き）

お久しぶりですっ。

やっとPCに触ることが出来ました（<―>）

第12話更新です。

第12話 太陽の色だから

「ふんふんふふふん」

「・・・・・・」

・・・何だろう。この変な雰囲気は。

あの宗教団体の根城を出てから、リユノワールは一言も話さない。いや、普段から無口な方ではあったもののここまで無口なのも珍しい。こちらが話しかけてもニコリともしてくれないし、返答してくれただとしても生返事。そして何故だか私の一歩後ろを態々遅れて歩いてくる。

それに対してご機嫌な聖獣こと少年は私と繋いでいる手をぶらぶらさせて、鼻歌交じりで楽しそうに歩いている。最初はずっと腕を背中から離してくれなくて（抱きしめている状態）困っていたのだが、なんとか言いくるめて手を繋ぐ今の体勢に落ち着いた。因みに少年の格好は気軽に外を歩けるようなものではなかった為、私がリユノワールにもらった黒い布を貸してあげている。流石に要所を包帯（みたいな布）で巻いただけというのはちょっと危険だと思うから。色々と。

「ねね、あき。」

「ん？」

「あのね、僕、別にこの布なくても平気だよ？寒くないしいつもあんな格好だから。それにね、なんかこの布、嫌な感じがするんだもん。」

体に巻いてある布を空いている方の手ではっさばさと動かす少年。実はこの問答、先ほどからずっと繰り返されている。

何故だか知らないが、彼はこの黒い布を嫌がるのだ。最初触るのに
も抵抗があつたくらいに。手触りもいいし、別に汚れているわけ
もない。たしかに少年には少し大きすぎる気もしないでもないが、
そこは纏い方次第でどうとでもなる。それなのに何故ここまで嫌が
るのだろうか。

「うん・・・私の服を貸すわけにはいかないし・・・でもその格
好だと怪我しちゃったりするかもしれないし・・・次の街に着くま
での我慢だから・・・ね？」

「うん！分かった！」

どうやら今回は納得してくれたらしい。内心ほっとしながら少年の
満面の笑みにつられてつい笑顔になる。

もう本当にかわいくてかわいくてしょうがない。背は私より少し小
さいのだが、綺麗な金色の目をくりんとこちらに向けてくるとき（
所謂上目遣い）なんか、もう最高にかわいい。なんか弟が出来たみ
たいで世話を焼きたくなる。こういうのを母性本能をくすぐる、と
いうのだろう。

「ふんふんふんふんふん」

「・・・そういえば、ランたち、もう首都に着いたのかなあ・・・」

ふとあの後のことを思い出しながら、晴天の空を見上げぼんやりと
呟く。

あの後、私たちは取り合えずランと青年に続いて建物の外に出た。
あの天然要塞の如く捻くれ曲がった迷路を、少しも迷わずに最初の
入り口にまでたどり着いた青年は一体何者なのだろうか。もし私た
ちだけで入り口まで戻れと言われても必ず戻れるとは言い切れない。
彼らがいて本当に助かったと後々思わずはいられなかった。

何はともあれ無事に脱出出来た私たちに、ランと青年は邪教の先導者らしき青年を追いかけるためにその本拠地があると予想されるこの国（以前森の中を運ばれていたときにリユノワールから此処はノルテ帝国領地内だと教えてもらった）の首都であるトイファに早急に向かう必要があると言う。

『じゃあ此処でお別れだねーアキ。また会えるといいね』

『じゃあな。それからお前と、特にお前。余計な世話かもしれないが、黒髪黒目は出来るだけ隠しておいたほうがいい。俺らみたいに気にしない奴は多くないからな。』

なんだかんだいってあのリツくんと呼ばれている青年は優しい。

因みに前者の“お前”はリユノワールで、後者の“お前”は私を指している。彼らは私たちが何故こんなところにいるか何も聞いていなかったが、恐らくなんとなくは察していたのだろう。でなければ私たちも彼らにとっては壊滅させる対象に入っているかもしれない。私たちが全然おかしくはないのだから。

と、まあそんなわけで彼らは、此処まで一緒に来た仲間？（入り口の手前に十数人ランたちと同じような格好をしている人が待機していた）に何かを口早に話し、あまり別れの挨拶もしないうちにあったという間にいなくなってしまった。春ちゃんカズのことで何か知っていることがないか聞こうと思っていたのに、色々あってすっかり頭の中から抜け落ちていたことを思い出した時にはもう遅かった。気づいたときにはもう彼らは私の視界にはいなかったのだから。

騎士というものはなかなか多忙らしい。私の元住んでいた世界で言うサラリーマンみたいなものだろうか。多分サラリーマンより上の位だと思うが、忙しさは比べてもなんら遜色ないように感じる。

そうして取り残された私たちは、此処に突っ立っているのもあれだということを取り合えず街の外に移動した。その際、聖獣をひとり

取り残すのも拙い気がして自然の成り行きで一緒に連れてきてしまったのだけど……。これで本当に良かったのかな？と思わなかったわけではないが、その張本人がそのことについて何も言及してないので一先ず良しとしておく。何かあれば少年のほうから話してくれるだろう。

「ふんふんふんふんふん」

・・・と思つて今の今まで放つておいたけど、実際そんな雰囲気は微塵も見られない。元いた場所に戻らなくてもいいのだろうか。リユノワールの話だと聖獣は此处からとても遠いところに住んでいると聞いた。きつと其処にいる彼の親も心配しているはずだ。

（つて・・・あれ？聖獣にお母さんつているのかな？・・・お母さんがいたら兄弟とかもきつというよね。うゝん・・・これって聞いてもいいことなのかなあ・・・）

「あき？どうしたの？」

「あ、ううん。なんでもないよ。」

丸い瞳をこちらに向けて首を傾げている姿を見て、無意識に笑みを浮かべながら首を横に振る。するとまた鼻歌が再開され、それと同時に私の手を握っている少年の手に少しかだけ力がこもった。私のことを心配してくれているのか、それとも唯単に偶々今手に力が入っただけなのか。どちらにせよ、このちょっとした少年の動作のおかげで心が一気にふんわりと軽くなったような気がした。

「・・・ところでリユノ。何気なくこっちの方向に歩いているけど、こっちの方面に町はあるの？」

少年のことをもわもわと考えているうちに結構進んでいたようだ。足が自然と止まる。

特に方向を気にせず思うがままにここまで歩いてきたのだが如何せん、地図を持っているわけでも頭の中にこころの地理が入っているわけでもない私が率先して進んだのがそもその間違いであった。今私の目の前には先ほどまでであった広大な草原が広がっているわけでも、はたまた賑やかな人の気配がする町でもなく、いかにも“幽霊出ます”的な真つ暗で深い森が広がっているのだから。異様な雰囲気と危険な香りが合わせ混ざりながらゆらゆらと漂っているように思える。

もしこれがゲームの中の世界だったら、私だったら迷わず引き返して迂回するルートを選ぶ。もしこの道しか通れないのならば、森に入る前にフィールドで安心して入れるレベルにまで上げてから入る。そんじやないと森の中で迷って、回復道具がどんどんと湯水のようになくなっていくって最終的にはモンスターに遭って全滅する才ちに決まっているのだ。

ーぎゃあ、ギヤア、ギヤギヤギヤツ・・・・・・・・

明らかに普通の動物の鳴き声じゃない。絶対おかしい。

それに忘れてはいけないのが、此処は現実であるということ。セーブも出来ないから、「あつ、全滅しちゃった・・・。よし、電源切ってまたセーブしたところからやり直そう。」なんてことが出来るわけでもなく。

「うん、ごめんね。戻ろう。」

「?あき、この先に行きたいんだよね?」

「あ、うん。でもなんかこの森、危険な感じがするから……。」

命を大事に。これ基本。

こんな危険そうな森、私の我侭だけで足を踏み入れるわけにはいかない。リュノワールや少年にまで命の危険に晒してしまうかもしれないのに危ない橋は渡れない。それにこの森を通らなくても何処かの街につく道はいくらでもあると思うし。

（うん。引き返したほうが絶対身のため。……態々ここを通らなくたって他の道があるかもしれないし。それに……本当にこの森、変な感じがする……。身が振れるような、とにかく変な感じ……。）

触らぬ神に祟りなし。

Uターンして歩き出そうとしたが、少年が森の方向をじつと見つめて動かない。彼も私と同じように何かを感じたのだろうか。不思議に思っただけで振り向くと少年はふと口を開いた。

「あき、ここを通り越したいんだよね?」

「う、うん。そうだけど……?」

「じゃあ僕に名前をつけてくれる?そうしたら森の向こう側まで運んであげる!」

「え?」

名前?って聞き返すと、うん名前!と嬉しそうに目を輝かせて言う。そういえば少年の名前、教えてもらってなかったなあ、とか思いながら特に断る理由もないので首を縦に振ろうとする。その途端いき

なりリユノワールは顔色を変えて、少年と繋いでいた手を無理やり引き剥がし私を抱きこむように少年との間に入り込んだ。唐突な行動に意表をつかれ目が見開かれるのが自分でも分かった。

「……だ。アキ。」

「？」

そして彼はぼそつと呟く。小さすぎてよく聞き取れない。上にあるリユノワールの顔に視線を向けて表情を伺おうとするがうまく影になっいて見えない。

ここからじゃありユノワールの体が邪魔になって見ることが出来ないが、きつとこの真つ黒の向こう側にいる少年も驚いて目を見開いていることだろう。時々リユノワールはこういった大胆な行動に出ることは最近分かってきたが、何が原因でこんな行動をするのか未だにはつきりしない。

（今度は一体どうしたんだろう？……何かあったのかなあ……？）

大人しく、ぎゅつと抱きしめられるような形でしばらくいたが数秒後開放される。それから何処か切なそうな表情で徐に口を開いた。

「お前は、……お前は俺の「だめ！」」

唐突に大声がキンと耳に響く。

僅かにリユノワールの頬が引き攣ったような気がした。

リユノワールの言葉を途中でスパツと綺麗に遮ったのは、珍しく……というか初めて見る表情、怒った顔をしている少年だった。今まで笑った顔しか見たことがなかったのでなんか新鮮に思える。そし

て気がつけば今度は少年に腕をぐいつと引つ張られ、足に力を入れてなかった体は容易く少年のほうに引き寄せられる。

「あき、だめ！！他の人とくつついちゃだめなんだよ！！手も繋いじゃだめ！」

「へ？」

間抜けな声を上げてしまった私は多分悪くない。急にこんなこと言われて驚かないはずがない。

何故だか自分より年下の子に行動制限されてしまった。Why？

「あきは僕と一緒にいればいいの。他はいらないもん！だからあき、早く僕に名前をちょうだい？そうすればずっと一緒に居られるようになるから！」

怒った表情を一転させて嬉しそうな表情になり、名前を頂戴と催促する少年。

（この世界じゃ、名前がないのが普通なのかな？リュノワールだって最初はそうだったし。でも元の世界じゃあこんなことって滅多にないのになぁ……。そういうのってなんだかこの世界が歪んでいるような気がして……。なんかやだな。）

何が普通で何が普通じゃないのか、その境界線を決めるのは自分自身。私にとっては名前がないことは普通じゃないと思うけど、彼らにとって名前がないことは普通のことなのかもしれない。

でもそれって、なんか違うんじゃないかな。

「……じゃあ、リュミール。リュミールは光、ソレイルは太陽って意味なんだよ。あなたの瞳は青空に輝く太陽のようだし、髪の色

毛は光がそこにあるようにきらきらしてて綺麗だから。」

こんな何の取り柄もない私でも出来ることなら進んでやる。名前が欲しいと言ったたら、いくらでもつけてあげる。それでこの少年が名前の大切さを知ってくれるのなら、それはとても素晴らしいことだと思うから。

「・・・りゅみ、いる・・・。うん！りゅみいる！！ありがとうあき！！これですつと一緒にいられるんだね！！」

「うん・・・？えつと、リユミ・・・じゃありユノと間違えそうだから、イルって呼ぶね。」

後半の言葉の意味がよく分からないが、どうやらついてくる気は満々のようだ。家に帰らなくていいのかな？と思う反面、もう少しだけ一緒にいたいなあと思う気持ちもあって、少年・・・イルの言葉は実はとても嬉しかったりする。別れはやっぱり寂しいから、イルと一緒にいたいと言っているのもしかしたら私と同じ気持ちから来ているのかもしれない。そうだったら嬉しいな。

「あ、ところでリユノ。さっき言いかけてたことって何だったの？」

イルに遮られてしまったりリユノワールの言葉の続きがその実気になつていたりし気になつていなかったり。

よく友達に「ねえあのさ。」と呼ばれて「なあに？」って答えると「やっぱなんでもない。」っていう返事がきたときにある、あのむずむず感だ。え、何々？何が言いたかったの？途中で話を切られると余計その内容が気になりだしてもどかしくてしょうがない。何とんでも聞いてやる、と変な意地まで出てくる。そんな厄介な心理的現象だ。

しかしリユノワールはなんでもない、と呟いてそっぽを向いてしま

った。どうやらまだ機嫌は直っていない・・・それどころか何故だか以前より悪化しているような・・・。

（うーん・・・怒ってはいなさそうだけどなんか素っ気無いよね。早く機嫌が直ってくれるといいなあ・・・。あ、そういえば・・・）

ふと先ほどイルとしていた会話の内容を思い出す。イルはこの森を越えることが出来ると言っていた。一体それはそういうことなのだろうか。出来れば無理はして欲しくない。そういう意も込めて恐る恐る聞く。

「ねえイル。さっきこの森を渡るって言ってたけど、あれってどういう意味？」

「僕が獣体形になって、空を飛んで渡るんだよ。」

そう言っクエスチョンてイルは、頭の上に疑問符を浮かべている私を見てにこつと笑う。そして私に体に巻いていた黒い布を渡した次の瞬間、イルの腕が歪に膨れ上がり、そこから侵食するように体全体が巨大化していく。

ークオオオオオオオン

透き通る遠吠えが目の前我真っ白な生き物から発せられる。

その生き物の黄金の瞳はしっかりと私を見据えていて、真っ白な毛は太陽の光を反射してきらきらと輝いていた。何処かでこの生き物を見たことがあった。そう、あのとき遭った真っ黒な生き物によく似ていた。ただ決定的に違うのはあのときのような虚ろな雰囲気がないこと。色は真反対の真っ白で、背中には二対の真っ白な天使のような羽根が生えている。四肢に飾りのように添えられた水晶の爪は穢れを知らない無垢な光を宿す。

とても綺麗な生き物だった。

思わず感嘆のため息が出てしまうくらいに。

無意識のうちに前に差し出した私の右手に吸い込まれるようにイルは頭を寄せてくる。優しく撫でてあげるとイルは気持ち良さそうに目を細めるのだった。そうしてること数分、大人しく撫でられていたイルは何か言いたげに頭を上げてこちらを見つめてくる。すると以前リユノワールがテレパシーで話しかけてきたように頭の中に声が響いてくる。

《さ、あき、後ろに乗って!》

「あ、うん。でもリユノも乗れる、かな?」

大きさはぎりぎり大人二人乗れる、というところだろうか。前に少し詰めれば乗れるかな。なんて考えていると、見計らったかのようにイルは爆弾を投下した。

《ね、あき。僕、あき以外は乗せないよ?》

「ええ!?!」

《だってあき以外に触られるの、いやだもん。大丈夫だよ。だってその人、精霊でしょ? 精霊は空飛べるもん。僕に乗る必要は最初からないよ?》

「・・・そういうことだ。・・・ありがとな、アキ。俺はきちんと後ろからついていく。」

「あ、そっか・・・。」

今の今まで全く忘れていたがリユノワールは精霊なのだ。精霊なら空なんてひとつとびなんだろうなあ。今まで歩いてきてくれたのはきつと私に合わせてくれていたから。本当に何処まで優しいんだろ

う、この人は。
自然と笑みが零れる。

「うん。分かった。じゃあ行こう、イル、リユノ。」

イルに恐る恐る跨る。毛はふかふか。意外とイルの背中のはっきりとしていて、余程無理な体勢でなければ落ちる心配はなさそうだ。寧ろそこの馬より快適そうである。ほっと安心する。

《しっかり掴まっててね！行くよ！》

安心したのもつかの間、イルの合図と共に感じたことのない空気の抵抗力を体中に感じ思わず目を閉じる。そして次に目を開けたときにはもう雲の近くに浮かんでいた。ちらつと後ろを見遣るとリユノワールがきちんとついてきているのが見える。それに安堵してまた前を向く。目の前には写真とかテレビでしか見たことのない壮大な景色が広がっていた。

（うわああ・・・すごい・・・！！私、今空飛んでるんだ・・・。
なんだかすごく楽しい！）

このとき、高所恐怖症じゃなくて本当に良かった。そう心の底から思った。

2
話
終
わ
り

第12話 太陽の色だから（後書き）

感想、アドバイス etc など待っています。
気軽にどしどし送ってください m () m

第13話 水色勇者はご機嫌ななめ（前書き）

久しぶりの投稿です。

第13話 水色勇者はご機嫌ななめ

S i d e カスタ
春太

「出発を一日遅らせる・・・だと？」

「す、すみません勇者様!!」

寝起きは最悪。

何故か朝早くにドタバタと城中が五月蠅くつい目が覚めてしまった。
枕元においてある昼アキから貰った腕時計に目を向けると、短い針は5
少し前にあるのが見える。

（朝5時5分前、か。）

普段なら5時きっかりに目が覚めるようになっていたのだが、如何
せん慣れない場所で寝た所為か少し早めに目が覚めてしまったよう
だ。まあ一概にそれだけが理由とは言えないが。

ベットに隣接している窓の外では見習いの騎士たちが一斉に剣の素
振りをしている。まだ朝早く薄暗い中よくやるものだ。そう少しだ
け感心しつつ、慣れないベットで凝り固まった体をほぐすように上
に伸びをしているときだった。

―バタンッ

「朝早くに申し訳ありません勇者様!」

ノックぐらいしろ。というか朝早くに申し訳ないと思うのなら部屋に入ってくるな。騒々しくて目覚めが悪い。

この一瞬でこれだけの悪態を思いついたが口には出さない。あくまで冷静に、心の中でのみ許される罵詈雑言を出来るだけ吐く。

「用件は？」

「それが・・・今日到着する予定だった勇者さまにお供する騎士団が、予想以上に今回の件の解決に時間がかかっているようでまだ城に着いていないのです！！」

それが自分に何の関係が？

そう思いながらいつの間にか目の前に居る朝早い来訪者、体中のあちこちにこれでもかというほどリボンをつけている砂色の髪の少女、ミリーナに目を向ける。

目がばちつと合い、少したじろぐ少女。

おそらく目つきの悪さのせいだろう。睨むように目を向けていることは自覚しているがやめる気は毛頭ない。特に彼女を気にしている（この場合好感を表す）わけでも、況してやこの状況に陥れた張本人に好意的に接する気もない。

と微妙な沈黙が堪えたのか、話を再開する。

「えっと・・・つまりですね、言いたいことというのは出発を明日に延ばして欲しい、ということなんです。」

「出発を一日遅らせる・・・だと？」

「す、すみません勇者様！！」

つまりはそういうことらしい。

「・・・・・・・・。」

―ギシッ

ベットから降りて靴を履く。

「・・・・あの、勇者様？」

「俺が最初に着ていた服は？」

「あ、はいっ。もう乾いたと思いますけど・・・・？」

「何処にあるかと聞いているんだが」

「すみませんっ、今すぐ持つてこさせます!!」

自分で取りに行くからいい、と言おうとしたときにはもうそこに彼女の姿はなかった。

嵐が去った後のような静けさが舞い戻ってくる。つかの間だが。

「・・・・はあ」

朝からなんだかものすごく体力気力共に消耗した。早く昼^{アキ}を見つけ出して、あの笑顔でこの疲れを癒して欲しい。

その為にも一刻の時間も無駄には出来ない。勿論一日棒に振るなんてなんてもつてのほか。かといってこのまま一銭もなしに外に出て何も出来ずに野たれ死ぬわけにもいかない。準備は万端にしておくに限る。取りあえず限界時刻^{タイムリミット}を昼に設定しておき、それまでにどうにかして準備を整え此処から脱出する。

（・・・・こうしている間にも昼が大変な目に遭っているかもしれない。俺にはゆっくりしている時間はないんだ）

―パタパタパタ

「ゆ、勇者さま、服をお持ちしました。」

はい、と綺麗にたたまれた制服を差し出されたのでお礼を言って受け取る。

で。

「・・・いつまでそこにいる気だ？」

「へ？」

「着替えるんだが」

その瞬間、ぼんつと彼女の顔が真っ赤に染まる。目の錯覚か頭から出るはずのない湯気が見えた。どうやらここに留まっていたのは故意ではないらしい。

「すすすすすすすすみませんッ！！今すぐでていきまふッ！！」

噛んだ。

さらに顔がこれ以上ないくらい真っ赤になる。もうそろそろ破裂でもするんじゃないだろうか。ここまで人間の顔は真っ赤になるものなんだな、と眺めていると、彼女は服を取りに行ったときの比じゃないほどの素晴らしいスピードで何かを叫びながらここから去っていった。

今度こそ本当の静けさが戻ってくる。

「・・・はあ」

ほんの一瞬、一息ついてから着替えに移る。上を脱いでベットに置き、ワイシャツに手をかけたときだった。

―ボタンッ

「すみません勇者さま！言い忘れていましたが、この後七時から朝食がありますのでその頃にもう一度来ますから、それまではゆっくりしていてく、だ、さ……」

少女の視線は俺の上半身。俺の視線は徐々に強張っていった少女の顔。そして視線が交差する。

「……………」

「先に言っとくけど、此处では叫ぶなよ。」
「―ッ」

急いで口を両手で押さえる少女。
叫ぶ気満々だった。

「あ、あのっ、ごだっ」

ごだ？

「じっ、じっ、ごめんなさいッ！！！！／／／／／」

―キィ、ボタンッ

待て、ごだってなんだ？

勿論心の中で思ったことであって彼女に聞こえるはずもない。もし声に出して聞いたとしてももう既にこの場に彼女はいなかっただろうが。

今度こそ本当の本当に嵐が去っていったようだ。随分性質の悪い嵐だ。

「・・・はあ」

もう何回目か分からないため息を吐いて、止まっていた着替えを再開した。

ーコンコン

「し、失礼しまふ。朝食の準備が出来ました。場所まで案内しますので着いてきてください」

何事もなかったかのように振舞う少女だったが、今は確かに思いつきり噛んでた。まだ今朝のことを引きずっているのだろう。といったも慰めるようなことはしないが。

ベットから立ち上がって部屋から出る。歩き出した彼女の少し後ろを着いていく。これから彼女と話すためだ。勿論二時間何もしていなかったわけではない。

「ちょっといいか？」

「はい？」

「今日朝食の後、城下町を見て回りたいんだが。」

「城下町、ですか？今日は特に祭典などを催してはいませんか？」

「違う。単なる興味からだ。この世界に来てまだ城の中しか見えない。出発するまでに色々と知っておきたいんだ。」

少女は考える素振りを見せる。

もしこれが撥ねられても一応他にも策はあるが、面倒なので出来ればこれで済めばいいのだが。

城下町で旅に出るのに他に必要なものがあるかもしれないから、と金を貰うことが出来れば上出来。

数秒経つてから少女からOKの返事が来る。どうやら第一次難関は突破のようだ。

「ただ私の独断ではいけないので、お父様にお聞きしてからになります」

「助かる」

こうして王、ミリーナ、俺と、三人だけの物静かな朝食を終えた後、無事王の許しを終えた俺はミリーナと護衛の騎士二人、計4名で城下町を探索することになった。

まあ護衛がつくのは仕方がない。その程度は予想の範囲内だ。この人混みだ。どうにかして

二人くらい撒くことは出来なくはない。しかしだ。

（・・・何でこいつ、仮にもこの国の姫が素顔晒して城下町に来れるんだ？）

「城下町なんて久しぶりです！あ、取りあえず勇者さまには本来出発する直前に渡す予定だった金貨十枚と銀貨十枚、あと銅貨十枚渡しておきますね。それぐらいあれば大抵のものは買えると思います」
「あ、ああ」

高級そうな皮で作られた小さな袋を渡される。小さいに見かけに油断していたが、持ってみると結構重たい。中には手の平に乗っかるくらいの大きさの薄く四角い板のようなものが数十枚入っているのが見える。金貨というから丸い形を想像していたが、どうやらこの世界では通貨は四角の形をしているようだ。

「先ず何処に行きましょうか？」

「取りあえず手前から順々に回っていくつもりだ」

「分かりました。では行きましょう！！」

何故か腕を掴まれる。手首を捻って逃れようとしたが急に彼女が走り出した為にそうはいかなくなってしまうた。

「・・・はあ」

前途多難。まさにこの言葉が今の状況にぴったりと当てはまる。

今日一日ため息がつきることばなさそうだ。

第13話 水色勇者はご機嫌ななめ（後書き）

感想をくださった方、本当にありがとうございます！

至らない点も沢山ありますが、これからもよろしく願いしますm

——— m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2654t/>

リベラリズムディア

2011年9月6日21時09分発行